

< 令和元年度修士論文(静岡文化芸術大学大学院文化政策研究科) >

創造都市推進政策としての  
アーティスト・イン・レジデンス事業の評価のあり方  
—浜松市鴨江アートセンターにおける試行を踏まえて—

Developing an Evaluation System of  
the Artist-In-Residence Program as a Creative City Policy  
- From Results of a Trial at Kamoe Art Center in Hamamatsu City -

真野 友理子 MANO Yuriko

(論文指導：静岡文化芸術大学教授 片山泰輔)

目次

要旨	1
序章 背景と問題意識	3
第1章 先行研究・事例の整理	6
第2章 浜松市における創造都市政策	13
第3章 評価システムの構築	19
第4章 評価の試行結果	24
第5章 評価システムの妥当性の検証結果	40
終章 結論と考察	43
参考文献	46
図表	48

## 論文要旨

全国に普及している創造都市政策に対して、アーティスト・イン・レジデンスの実施が政策の推進に貢献すると考えられる。アーティスト・イン・レジデンスによって都市にクリエイティブな外部人材を取り入れることができるためである。しかし、その評価手法が確立していないことに課題がある。そこで本研究は創造都市推進政策としてのアーティスト・イン・レジデンスの評価のあり方を明らかにすることを研究目的としている。

まず、本研究で事例として扱う浜松市について工業都市としての特徴の整理や文化政策上の課題を指摘し、アーティスト・イン・レジデンスを実施することの意義を確認した。次に評価を行うためのロジックモデルや評価指標の構築を行った上で実際に浜松市鴨江アートセンターのアーティスト・イン・レジデンスを事例に評価の試行を実施した。試行にあたっては応募資料等に基づく定量的調査と事業に関わる人々を対象としたインタビューの定性的調査を組み合わせた。さらに、試行結果をもとに現場の運営者と浜松市に対して評価システムの有効性や運用可能性についてインタビューを行い、その結果を踏まえて評価システムを実際の運用に即したものとなるよう改善を加えた。

これらの調査や分析を経て、創造都市政策としてのアーティスト・イン・レジデンスを評価するためのシステムを開発した。評価システムの手法的な特徴は同一の指標について複数の立場から検証を行う仕組みになっている点である。この評価システムによって広報業務などの事業運営の成果に対する評価が実現し、また文化芸術事業の専門家である現場職員のスキル向上や事業実施場所のポテンシャルなど創造都市政策への効果を検証することも可能にした。本研究で開発した評価システムは現場での運用を基本とする事業評価システムであり、現場のPDCAに最も貢献するものである。そして、中長期的には政策にも影響を与え得る。

キーワード：創造都市、アーティスト・イン・レジデンス、文化芸術事業の評価

## Abstract

Creative city policy has spread across the country. The Artist-In-Residence program is expected to contribute to the promotion of this policy. The Artist-In-Residence program can bring creative outsiders to the city. However, the evaluation system has not been developed, which poses a problem. Therefore, the purpose of this paper is to develop an evaluation system for the Artist-In-Residence program as a creative city policy.

In this paper, Hamamatsu city is considered as an example. First, this paper summarized the characteristics of Hamamatsu city as an industrial city and identified issues in cultural policy. The significance of the Artist-In-Residence program was confirmed. Next, after construction of a logic model and indices, an evaluation trial was actually performed using the Artist-In-Residence program at Kamoe Art Center in Hamamatsu city. In the trial, we combined a quantitative survey based on application materials and a qualitative survey of interviews with people related to the project. Furthermore, from the results of a trial, we interviewed the site operator and Hamamatsu city officials about the effectiveness and operability of the evaluation system. The evaluation system was improved so that it would be suitable for actual operation.

In this paper, I developed a system for evaluating the Artist-In-Residence program as a creative city policy from these surveys and analysis. The feature of this evaluation system is that the same index is verified from multiple viewpoints. This evaluation system has realized the evaluation of the results of program management, such as public relations work. This evaluation system also made it possible to verify the effects of creative staff on the arts and culture, such as improving the skills of staff and the potential of project sites. The evaluation system developed in this paper is a system for evaluation of program management based on on-site operation and contributes the most to on-site PDCA. In the medium to long term, it may affect policy.

Keywords : Creative city, Artist-in-residence, Evaluation system of culture and arts

## 序章 研究の背景と問題意識

地域の活性化に対してアートという切り口から取り組む試みは近年各地で試されるようになってきた。その典型が創造都市政策であり、チャールズ・ランドリーの著書 *The Creative City: A Toolkit for Urban Innovators*(Landry(2000))は大いに注目を集め、文化芸術の創造性と多様性を活かした都市再生の挑戦が世界各都市で取り組まれるようになっていった。21 世紀における都市の持続的な発展のためには産業構造の転換が必要であり、衰退した工業都市からの脱却を目指したバーミンガムやナントの事例が参考になる。文化による都市再生の成功例として知られるナントでは創造都市政策の一環で旧ビスケット工場をリノベーションしアートセンター「リュウ・ユニック」を設立するなど積極的な政策展開を行ってきた。世界的には 2004 年にユネスコ創造都市ネットワークが創設されており、加盟都市に広がりを見せている。国内に目を向けてみると、札幌市、横浜市、浜松市、名古屋市、北九州市などをはじめ各地で創造都市を目指した取り組みが行われている。また、最近では創造農村という考え方も普及しつつあり、文化芸術を活かした都市再生・地域再生がわが国において大きな課題として取り上げられている現状が見えてくる。2013 年に設立された創造都市ネットワーク日本においては 2019 年 4 月 26 日時点で 111 の自治体が参加している<sup>1</sup>。

創造都市政策を掲げるわが国地方都市の中でも特に浜松市は産業の中心が工業であり、文化産業の集積が少なく、芸術家の集積の少なさを指摘できる<sup>2</sup>。文化芸術イベントの盛んな横浜市や伝統工芸の根づく金沢市と比べても文化消費の充実度は低く、浜松市は工業都市のモデルに近いだろう。同市の状況に似た都市としては北九州市が挙げられる。浜松市においては 1981 年の第二次総合計画で初めて「音楽のまちづくり」が掲げられ、2000 年に旧浜松市として最初の文化振興ビジョンが策定された。その後、創造都市・浜松を目指すため 2009 年 3 月に現在の浜松市文化振興ビジョン策定し、2014 年 12 月にはユネスコ創造都市ネットワークの音楽分野での加盟が認定されるなど取り組みを続けている。しかし、音楽鑑賞の機会と市民のアマチュア音楽活動が盛んな一方で、浜松市自らが発信する音楽文化という点ではその基盤は脆弱な状態であると批判されている(片山ほか 2010)。多様で活発な文化芸術活動や産業における大きな革新は未だ実現していないのが現状である。このように、わが国の自治体において積極的に導入されてきた創造都市政策は近年その展開に行き詰まりの様相を呈している。

各都市は創造都市政策として市民参加型アートイベントや文化施設の活用などに取り組んでいるが、その地域に多様でクリエイティブな人的資源を抱えていなければ施策の充実が図りにくいだろう。人的資源を抱えていない都市においても効果が得られる可能性のあ

<sup>1</sup> 2019 年 5 月 23 日時点で自治体以外の団体も 42 団体参加している。

<sup>2</sup> 第 2 章第 1 節で詳細を述べているため、本稿 p. 13 を参照されたい。

る取り組みが「アーティスト・イン・レジデンス」である。アーティスト・イン・レジデンスとはアーティストが特定の地域で一定の期間制作を行うという取り組みのことであり、1990年代より日本全国に広まって現在に至る<sup>3</sup>。アーティスト・イン・レジデンスの本来目的は若手アーティストの育成や国際交流である。しかし、ニッセイ基礎研究所(2013)においてアーティスト・イン・レジデンスの効果の3つのベクトルの内の1つとして「アーティスト・イン・レジデンスが立地する地域への効果」が挙げられており、当該事業が地域振興に貢献する一面も指摘できる。取り組みを実施することでレジデンスアーティストとして一定期間人為的に多様な人材を取り入れることが可能で、プロのアーティスト・クリエイターに乏しい地方都市にとって人材獲得のチャンスとなる。また、レジデンスアーティストの活動が創造都市において特にその地域に在住するクリエイティブな人材に対して創造的な刺激をもたらす可能性にも効果が望める。具体的には、表現領域やバックグラウンドの異なるレジデンスアーティストと地域のクリエイティブな人材が交流することで、都市の固有の文化に刺激をもたらしたり新しい産業の誕生に寄与したりといった効果が期待できる。そのため、アーティスト・イン・レジデンスは創造都市推進事業として注目に値する事業といえるだろう。

次に、文化芸術事業の評価について取り上げたい。文化芸術事業の評価は近年大きな注目を集めており、全国各地で増え続けるアートの取り組みに対して今まさにその効果が問われている。現状の主たる評価方法は来場者数や事業収入などの分かりやすい数値や経済波及効果の分析にとどまっていた、定量的評価でさえも適当な評価が実施されているとは言い難い。文化芸術事業の効果は必ずしも数値で測れるものではないため、定量的評価と定性的評価を適切に組み合わせて実施することが求められるが、その評価手法やシステムは確立しておらず、文化芸術事業について適切な評価のあり方を検討することは緊急課題であるといえる。同じく、創造都市政策を推進していくためにも個々の事業の適切な評価が不可欠であり、PDCA サイクルをしっかりと回していくことが政策の更なる展開に繋がるだろう。

アーティスト・イン・レジデンスは、自治体や文化財団などが主導し公立文化施設を活用して実施するもの、芸術祭の取り組みの一環として実施するもの、アーティスト個人が運営・実施するもの等様々なスタイルがある。同様に、個々のアーティスト・イン・レジデンスの目的も多様で一括りに語ることは難しく、事業の評価を行うにしても画一的な理論モデルを組み立てることは困難である。しかし、これらの多様なスタイルの中でも創造

<sup>3</sup> 日本全国のアーティスト・イン・レジデンス総合データベース「AIR\_J」にわが国のアーティスト・イン・レジデンス事業の概況がまとめられている(荻原康子 2001)。  
<http://air-j.info/resource/article/now00/>

都市政策を掲げる自治体において実施されるアーティスト・イン・レジデンス<sup>4</sup>は、その効果や成果を創造都市の考え方の下検証していくことが可能である。

最後に、本論文は、これまで様々な議論がなされてきた創造都市論についてその理想形を実現するためにどのような取り組みがなされるべきか考察する立ち位置に立脚するものであり、わが国において創造都市に向けて取り組む都市の現在のあり方を肯定する立場にはないということについて留意されたい。

---

<sup>4</sup> 創造都市を掲げる都市で実施されるアーティスト・イン・レジデンスは、浜松市における浜松市鴨江アートセンターのアーティスト・イン・レジデンス事業や、北九州市の KITA-Q COMIC Artist in Residence などが挙げられる。

## 第1章 先行研究・事例の整理

### 第1節 創造都市論の系譜とわが国における実践

自動車を中心に考えられたアメリカの近代都市計画に対して批判の立場を取ったジェイコブズの著書 *The Death and Life of Great American Cities*(Jacobs(1961))は、不適切な都市計画によって街に荒廃がもたらされた点を指摘し、都市が魅力的かつ活力ある場として機能するために必要な多様性を生成する4つの条件<sup>5</sup>を提示した。ジェイコブズの著書を皮切りに都市の文化的側面に着目した研究が次々と現れ、大きな注目を集めたのがランドリーの *The Creative City: A Toolkit for Urban Innovators*(Landry(2000))である。ランドリーは文化芸術の「創造力」が都市や地域を再生する原動力であるとし、数々の都市再生の取り組み事例から帰納的に導いた「創造都市」の概念を提唱した。人、歴史、環境といった地域の資源を最大限活用し、クリエイティビティを活かして都市再生に取り組む考え方が世界中に広まることとなる。その後フロリダは *The rise of the creative class*(Florida(2002))において「クリエイティブ・クラス」の概念<sup>6</sup>を提唱し、多様性のある場所がクリエイティブな人々を惹きつけ、クリエイティブな人々が混じり合う場所で新しいアイデアが生まれ、クリエイティブ資本が集積してゆくことでイノベーションの可能性が向上し雇用の創出や経済成長に結びついていく理論を提唱している。この本の中でフロリダは地域の経済成長には3つのT(技術(technology)、才能(talent)、寛容性(tolerance))が手がかかりとなると指摘している。3つのTをもとにゲイ指数やボヘミアン指数を用いて都市のデータ分析を試みている点が特徴的である。また、フロリダはロバート・パットナムの社会資本理論における「強い絆」に対して「弱い絆」が都市や地域のクリエイティブな環境にとって重要であると主張している<sup>7</sup>。弱い絆が重要である最大の理由はより多くの関係が持てることにあると説明し、新しい人々を受け入れ、新しいアイデアを吸収するというのがクリエイティブな過程において肝要な点であるとしている。世界的な創造都市の動向としては、2004年にユネスコ創造都市ネットワークが創設され加盟都市はグローバルに広まっている。

わが国でも2000年代より創造都市論が急速に普及してゆき、札幌市、横浜市、浜松市、金沢市、北九州市など多くの自治体が創造都市を掲げて取り組みを行なってきた。佐々木

<sup>5</sup> Jacobs(1961)は多様性を生成する要素を以下の4つにまとめている。①一つの地域や地区において住宅地やオフィスのような単一の機能でなく複数の機能を持たせること、②いくつもの道順を辿れる小規模区画の必要性、③地域や地区において古い建物が適切な割合で存在すること、④高い人口密度。

<sup>6</sup> Florida(2002)はこの階層の中核を科学、エンジニアリング、建築、デザイン、教育、芸術、音楽、娯楽に関わる人々と定義している。フロリダの定義においてはクリエイティブ・クラスと他の階層とを分ける違いは報酬を何から得ているかということに依る。また、クリエイティブ・クラスは創造的で多様性をも与えてくれる場所に引き寄せられるとしている。

<sup>7</sup> Florida(2002)は、社会資本理論における「強い絆」は家族や友人、付き合いの長い隣人や同僚との間に結ばれ、長期にわたることが多く、生活の多様な場面での信頼と相互依存に特徴があったとした。これに対して密着したコミュニティはイノベーションを妨げると主張し、ライフスタイルの変化やコミュニティの進化によって生まれてきた多様性やコミュニティへの参入障壁の低さ、集団の中で自分らしくいられることなどを重視する「弱い絆」が重要であるとしている。

(2012)はボローニャや金沢などの国内外の事例を紹介し日本における都市再生の方向性を示している。また、創造都市論における「創造の場」について独自に3つの要素<sup>8</sup>を示している。わが国では2007年度より文化庁長官表彰(文化芸術創造都市部門)<sup>9</sup>が創設されたり2013年に創造都市ネットワーク日本が設立されたり全国的な広がりを見せている。中にはユネスコ創造都市ネットワークに加盟認定を受ける自治体もあり、2019年10月30日に認定を受けた旭川市を含め国内9都市が加盟している。また、2011年に一般社団法人ノオトによって「創造農村」の考え方が提唱され、都市という表現に当てはまらない地域が創造的発展を目指してゆく流れも生まれている。しかし、わが国ではほとんどの事例が創造都市の考え方を輸入して自治体政策に取り込んでゆくスタイルをとってきたため、政策展開は途上段階にあり日本の都市再生の成功モデルとなれる事例を見出すのは難しい。

## 第2節 アーティスト・イン・レジデンス導入の歴史と現在

アーティスト・イン・レジデンス(Artist-In-Residence)とは、一般に国内外から一定期間アーティストを招聘し滞在制作を行う仕組みとそれを支えるシステムのことを指す。アーティストの制作の場や成長の機会を提供する目的がある。滞在するアーティストに対して作品などの成果を発表することを条件として課さず、その土地での滞在の経験やリサーチ、アイデアの発掘などアーティスト自身の自己研鑽を目的とするものも多い。それぞれの事業ごとに目的や特徴、個性が様々で、一つの定義で括ることは難しい。

国際交流基金企画室(1995)によれば、アーティスト・イン・レジデンスの起源は諸説あり、ヨーロッパで17世紀頃から若手芸術家を国外に派遣し成果を持ち帰る国費奨学金留学制度が起源の一つに挙げられることがあるとしている。菅野(2009)は現代におけるアーティスト・イン・レジデンスのシステムを確立したとされる取り組みがクンストラーハウス・ベタニエン(ベルリン、1975年設立)である<sup>10</sup>と述べている。このほか、アカデミー・シュロス・ソリテュード(シュトゥットガルト、1990年設立)など海外の事例がニッセイ基礎研究所(2013)において豊富に紹介されている。1993年にはアーティスト・イン・レジデ

<sup>8</sup> 佐々木(2012)による創造の場の3つの要素は①芸術家と企業や市民を結びつけるコーディネーターの存在、②人間的信頼関係を基礎にしたネットワークの結び目の機能、③グローバルな異文化との交流や伝統工芸や芸能と現代のハイテクや芸術との出会いをおしすすめる機能である。

<sup>9</sup> 文化庁長官表彰に文化芸術創造都市部門を設け、市民参加の下、文化芸術の力により地域の活性化に取り組み、特に顕著な成果をあげている市区町村を表彰している。「都市」という枠組みを超えて市区町村に対して表彰を行う点が特徴的で、中之条町(群馬県、2009年度表彰)や神山町(徳島県、2012年度表彰)などが挙げられる。

『文化庁長官表彰(文化芸術創造都市部門)被表彰都市一覧』

[https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka\\_gyosei/chiho/creative\\_city/chokan\\_hyosho.html](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/chiho/creative_city/chokan_hyosho.html)

<sup>10</sup> 当時ベルリン芸術院長だったミヒャエル・ヘルターらは1847年に建設された病院の建物を再利用することをベルリン市に提案し、1975年にクンストラーハウス・ベタニエンが設立された。70年代のハイアートを保存展示する権威ある場所としての美術館に対して自由な表現の場を求める活動に関連しており、当初から活動の中心にアーティスト・イン・レジデンスをおいていた(菅野2009)。



ンスの運営者を中心とした国際的なネットワークであるレザルティス(Res Artis)<sup>11</sup>が設立された。

ここで、わが国に導入されるようになったアーティスト・イン・レジデンスの変遷を概観してみると、1980年代後半の在京大使館等による自国アーティスト招聘の事例から1990年代から主流となる自治体主導で地域振興も目的に含む事業の展開へ繋がってゆき、ここ数年はマイクロレジデンスの取り組みが増加傾向である様子が観察できる。1980年代後半、わが国においてアーティスト・イン・レジデンスの取り組みの先駆けとなった事例がオーストラリアやフランスが日本にアーティスト滞在施設を設け、自国のアーティストを招聘した例である<sup>12</sup>。当時自治体はこのような取り組みに関心を高め、1993年の「TAMA らいふ21」(東京都)や1994年開始の「アーカスプロジェクト」(茨城県)などが展開されるに至る。現在は京都芸術センターや滋賀県立陶芸の森、城崎国際アートセンターなど各地でアーティスト・イン・レジデンスが実施されている。わが国自治体は国内外からアーティストを招聘して活動を支援したが、自治体主導で導入されていたアーティスト・イン・レジデンスは、財源が税金であるがためにアーティスト育成の目的だけでなく地域振興や地域活性化など事業が立地する地域に対する効果の還元を求める傾向にあるということに注目したい。菅野(2009)はこのような傾向が日本のアーティスト・イン・レジデンスの特徴となっていることを指摘している。滞在アーティストの成長や経験に重きを置くアーティスト・イン・レジデンスの本来目的に加えて別の機能が要請されているのである。本研究では、このようにわが国自治体主導で導入され、地域への効果の還元も要請されるタイプのアーティスト・イン・レジデンスについて「日本型アーティスト・イン・レジデンス」と呼称する。

わが国におけるアーティスト・イン・レジデンスに対する支援には文化庁や国際交流基金が関わっている。文化庁による支援は1997年から開始しており、2011年度より実施されている「文化芸術の海外発信拠点形成事業(アーティスト・イン・レジデンス事業)」は当初5年間の継続補助を掲げた事業であった。しかし、2013年度に「行政事業レビュー公開プロセス」及び「財務省予算執行調査」の対象となり翌年度の事業実施にあたって大幅な見直しがなされた過程について内村(2014)が報告している。国際交流基金はアーティスト・イン・レジデンスの情報やデータを研究する機関として1993年に「アーティスト・イン・レジデンス研究会」を立ち上げ、報告書の作成を行ったり日本全国のアーティスト・イン・レジデンス事業のデータベース「AIR\_J」を作成したりしてわが国アーティスト・イン・レジデンスの普及・展開に貢献している。

<sup>11</sup> 本部をオランダ・アムステルダムに置いている。2019年2月6日(水)～8日(金)に京都芸術センターでレザルティス(Res Artis)の国際会議が開催された。

<sup>12</sup> オーストラリア・カウンシルによる1987年設立「VACBスタジオ」(東京都)やフランス外務省による1992年設立「ヴィラ九条山」(京都府)など。

ニッセイ基礎研究所(2013)では文化庁から調査研究を受託したニッセイ基礎研究所が海外のアーティスト・イン・レジデンスの事例を数多く調査し、諸外国においてどのように当該事業が実施されているかを明らかにしている。また、アーティスト・イン・レジデンスについてその社会的意義や役割、効果を整理しており、その中でアーティスト・イン・レジデンスの効果について「アーティストへの効果」「アート・コミュニティへの効果」「アーティスト・イン・レジデンスが立地する地域への効果」といった3つのベクトルを示した。また、若手アーティスト育成の目的に加えて様々な目的が要求されるアーティスト・イン・レジデンスについて、アーティスト・イン・レジデンスを文化政策の視点から捉えて政策上の位置付けも明らかにしている<sup>13</sup>。菅野(2009)は「人材流出という極めて深刻な状況に面している地域も多いが、短期間ならば様々な才能の地元への還元が可能であり、優れた才能を共有の知財、人財と考えることも必要であろう。人間にも地域にも、文化力や創造力が問われる時代にあって、地域の創造の拠点として、AIR<sup>14</sup>に潜在する可能性は大きい(菅野(2009), p203)」と述べており、アーティスト・イン・レジデンスの実施が一定期間外部人材の獲得に繋がることや地域に対してクリエイティブな影響をもたらす可能性について言及している。本章の第1節で創造都市の考え方やその系譜について概観してきたが、アーティスト・イン・レジデンス実施によって見込まれる外部人材の取り入れによる多様性の実現や地域への創造的な効果について、創造都市政策との関連性を指摘することができる。

菅野(2009)は地域貢献が求められる日本のアーティスト・イン・レジデンスの特徴を指摘するとともに、その課題の一つとして適切な評価を挙げている。行政主導のアーティスト・イン・レジデンスに関連し、当該事業も含め文化芸術事業全般について評価のあり方を検討してゆく必要性に言及した。社会に果たす役割や効果が示されなければアーティスト・イン・レジデンスの意義が理解されにくく予算の問題に直面することになる。そして、自治体がイニシアチブをとる文化事業としてのアーティスト・イン・レジデンスの評価を考える際には、アーティスト本人の成長や芸術面に関する評価と地域政策としての評価を区別して捉える必要があるだろう。本研究ではこのような日本のアーティスト・イン・レジデンスの特徴に焦点をあてて評価研究を行う。

<sup>13</sup> ニッセイ基礎研究所はアーティスト・イン・レジデンスの社会的意義と役割について以下の文化政策上の位置付けに整理している。①文化創造：アーティストの芸術作品、日本の文化芸術の創造を推進する政策、②人材育成：アーティスト、キュレーター、プロデューサー、研究者等の人材を育成する政策、③文化発信：日本の文化芸術やアーティストの活動を国内外に広く発信する政策、④国際交流：文化芸術やアーティスト等の国際交流を促進する政策、⑤地域活性：アーティストの滞在や住民との交流などを通して地域の活性化に寄与する政策、⑥文化外交：アーティストや文化芸術を介した国際的な信頼関係の構築に資する政策、⑦国際貢献：新たな芸術表現の追求や海外アーティストの育成など、国際的な文化芸術の振興において日本が果たする国際貢献政策、⑧プレゼンス：上記の活動を通じて、日本の文化的、国際的プレゼンスを高める政策

<sup>14</sup> AIRとは「アーティスト・イン・レジデンス(Artist-In-Residence)」の頭文字をとった略である。

### 第3節 わが国における文化芸術事業に対する評価の研究と実践の変遷

1990年代末頃からわが国自治体において評価制度の導入が普及し始めた。田中(2014)は自治体における評価の主要な普及促進要因を①行政改革の必要性<sup>15</sup>、②国からの圧力<sup>16</sup>、③アカウントビリティ向上の要請<sup>17</sup>、④NPMの影響<sup>18</sup>、⑤自治体の横並び主義<sup>19</sup>の5つに整理している。評価の実施にあたっては評価結果をそのままにせずPDCAサイクル(Plan(計画)-Do(実施)-Check(評価)-Action(改善))を回すことが重要である。自治体行政における評価制度が注目される中で、自治体文化政策に対しても適切な評価の確立が必要である。

文化芸術事業に関する評価について、海外では英国アーツカウンシルの芸術性評価スキームやエディンバラ・フェスティバル評価研究などの取り組みが行われている。これらの事例では芸術性の評価を助成金決定のための根拠の一つにしたり、事業実施による効果を様々な側面から横断的に評価する手法の確立に取り組んだりしている。わが国においても文化芸術事業の評価研究に取り組む試みは近年注目度を増してきている。ニッセイ基礎研究所(2012)では「文化芸術の振興に関する基本的な方針(第3次基本方針)」に基づく4つの主要な補助事業「優れた劇場・音楽堂からの創造発信事業」「文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業」「文化芸術創造都市推進事業」「文化芸術の海外発信拠点形成事業」を対象に、文化政策の評価に必要な指標などを考案した。この報告書における調査研究では、文化芸術事業の定量的な側面の効果だけでなく定性的な側面にも配慮して評価手法を検討している。文化芸術の効果や成果は量的データだけでは測定が難しいため、量的・質的データをバランスよく組み合わせることで評価を行うことが理想である。文化政策の領域から評価について研究している文献では、吉田(2012)が都市型芸術祭「あいちトリエンナーレ」を政策立案・決定のプロセスの分析を通して政策評価指針の試案を作成している。小林(2014)は近年わが国で社会的インパクト評価の考え方が導入されつつある状況から、評価研究について先進的な英国において社会的インパクト評価に対して関心が高まった政治的背景を明らかにした。文化芸術事業の評価に対して、アウトプットやアウトカムに注目してデータを取ったり、そこに社会的インパクトの側面を取り入れたり、政策立案から決

<sup>15</sup> 1990年代終わり頃、財政悪化や地方分権化により行政の簡素化や合理化(事務事業の廃止・統合や給与の削減といった行政の減量化(量的な削減))が強く求められるようになり、当時は自治体で評価という新しい手法を取り入れる条件が整っていたと考えられる(田中2014)。

<sup>16</sup> 国は1985年に「地方行革大綱」を策定し、その後1990年代に2度にわたって「地方行革指針」が出された。田中(2014)はこのように1980年代以降自治体に対して国から一貫して行政改革を求める圧力が存在していた点を指摘している。

<sup>17</sup> 評価には、行政の組織や活動の実態を明らかにし、その意義や効果を問い、最終的に評価結果を内外に示すという要素が必然的に含まれている。そのため、評価を実施することが行政改革に資するだけでなく、アカウントビリティの向上にも繋がるとすれば、自治体で評価を導入する動機の強化につながると田中(2014)は指摘している。

<sup>18</sup> New Public Management(新公共管理または新公共経営)は「小さい政府」を志向し、競争原理の導入や民間企業の経営理念と手法を取り入れる動きのことである。また、NPMでは事後的な評価活動の実施が強調され、1990年代後半にNPMの考え方が普及するとともに評価が国内の自治体に広がっていった(田中2014)。

<sup>19</sup> 横並び主義とは、規模や特徴が似通った自治体間や近隣の自治体同士の間で典型的に観察される自治体或いはその職員の行動様式のこと、他の自治体取り組み始めたことに対して遅れまいと追随する傾向を指す。田中(2014)はこの横並び主義によって自治体評価制度の導入が後押しされたことを指摘し、これにより評価制度の模倣が起こって極めて類似性の高い評価制度が普及する結果になったと主張している。

定に至る過程を分析したりと評価のためのアプローチは実に多様で今後も試行錯誤がなされるだろう。

このような文化芸術事業の評価に関する学術的な議論を踏まえ、評価の実践が行われている事例の変遷を見てみよう。大規模な芸術祭やアートイベントの評価に試みる取り組みは札幌国際芸術祭 2014 事業評価検証会(2016)や六本木アートナイト実行委員会(2017)などが挙げられる。いずれも有識者が評価システムの開発に携わっており、評価のためのロジックモデルと指標案を作成している。また、過去のデータなどを用いて調査を行い、評価を試行している。文化庁においても平成 30 年度国際文化芸術発信拠点形成事業の支援対象事業の要件として「事業実施の効果について明確な目標を設定し、地元の大学やシンクタンク等の専門機関による効果検証を行う計画であること」を求めており、補助を受けるにあたっては評価のプロセスの導入が不可欠となっている。この補助事業に採択された 11 の事業のうち、静岡市による「SHIZUOKA FESTIVALS」の実施によるフェスティバル・シティの構築」においてはフェスティバル評価システムの構築業務を一般社団法人文化政策経営人材研究所が受託し、有識者と行政職員を交えて評価手法の検討を行っている(一般社団法人文化政策経営人材研究所(2019))。注意したい点は、これらの事例報告は評価に対して予算・人員を投入することができた大規模な芸術祭やアートイベントということである。文化芸術事業の社会的インパクトを測定しようと試みる取り組みは近年増加する一方で、社会的インパクトを及ぼすには至らなくとも地域に何らかの効果・成果をもたらすと思われる個別の文化芸術事業についての評価は現状あまり研究が進んでいない。

## 小括と研究目的

上記の先行研究の整理を通して、創造都市は多様で創造的な人材を擁し、都市の問題をクリエイティブに解決し、新しい経済システムを構築していく都市であることを確認した。これを実現するために有効であると考えられるのが、外部人材を取り入れることで地域や地元のクリエイティブな人材に創造的な刺激と多様性をもたらすことができるアーティスト・イン・レジデンスである。つまり地域への効果を期待する日本型アーティスト・イン・レジデンスであり、自治体文化政策として評価は必須である。しかし、創造都市におけるアーティスト・イン・レジデンスについて、事業を評価して効果を検証し PDCA サイクルを回してゆく仕組みは整えられておらず、評価システムの開発が緊急課題であるといえる。また、評価システムは予算・人員に限りのある現場で導入しやすく、かつ創造都市で実施されるアーティスト・イン・レジデンスの事例に対して汎用性の高いものである必要がある。

以上のことを踏まえ、本研究は、創造都市における文化芸術の取り組みの中でも特にアーティスト・イン・レジデンス事業に焦点をあててその事業評価のあり方を明らかにすることを目的としている。なお、研究を行う上で浜松市鴨江アートセンターのアーティスト・

イン・レジデンス事業を事例として扱うこととする。本研究はアーティスト・イン・レジデンスの事業評価における実務的な応用を想定した評価手法の開発が最終目的であり、浜松市鴨江アートセンターにおけるアーティスト・イン・レジデンス事業の評価結果を示すことが目的ではないことについて留意されたい。

事例選定の理由としては、創造都市を目指して取り組む浜松市には文化産業の集積が少なく、芸術家の集積も少ないことから、工業都市のモデルに近いと考えられるため<sup>20</sup>である。

---

<sup>20</sup> 第2章第1節で詳細を述べているため、本稿 p.13 を参照されたい。

## 第2章 浜松市における創造都市政策

### 第1節 「音楽の都」創造都市政策の変遷

浜松市は人口 802,886 人<sup>21</sup>を抱える政令指定都市である。また、同市は繊維・楽器・輸送機械を三大基幹産業とした工業都市でもある。高度経済成長の波に乗って発展を遂げて、世界に誇る大企業の本社や工場が多く立地しているのが特徴である。経済産業省による平成 30 年度工業統計調査によれば、浜松市の製造品出荷額等の項目は 1,950,092 百万円となっている。表 2-1 はユネスコ創造都市ネットワークに加盟している国内都市の製造業就業者数をまとめたものである。これを元に表 2-2 では 15 歳以上就業者総数 1000 人あたりの製造業就業者数をランキング化した。15 歳以上就業者総数 1000 人あたりに占める製造業就業者数は浜松市が 1 位となっており、創造都市を目指して取り組む国内都市の中でも浜松市は特に工業都市の典型であることが分かる。近年は光技術など先端の研究開発で評価を受ける企業も現れ、市内産業の技術力は非常に高いレベルにあるといえるだろう。このように地域産業の発展に力を入れてきた浜松市であるが、既存産業の成熟による経済停滞や、時代の変化によるモノの豊かさだけでなく生活や文化の充実の要請など、まちづくりにおける転換期を迎えるようになった。都市としてのあり方の方向転換に際して浜松市における文化振興政策への取り組みが始まったのである。

1981 年の第 2 次浜松市総合計画新基本方針において初めて「音楽のまちづくり」が掲げられた。1994 年にはアクトシティ浜松がオープンし、翌 1995 年には公立では日本初となる楽器博物館が開館するなど、90 年代には積極的にハード面の整備を行ってきた。2000 年には合併前旧浜松市として最初の文化振興ビジョンを策定しており、現行の文化振興ビジョンは 2009 年に改定されたものである。ソフトの面では浜松国際ピアノコンクールの世界的認知度は高く、国内外から多くの人が訪れる同市を代表する音楽事業となっている。また、アクトシティ音楽院の教育プログラムも同市の音楽振興政策における代表的な取り組みである。そして、このような行政の取り組みだけにとどまらず、市民手作りの音楽祭であるやらまいかミュージックフェスティバル等市民主体のイベントも特徴的である。

第 1 次浜松市総合計画(期間平成 19～26 年度)より将来の都市像に「市民協働で築く『未来へかがやく創造都市・浜松』」という目標が掲げられた。2009 年に浜松市総合計画を上位計画として文化振興ビジョンが制定され、文化に関わる同市の目指すべき都市像を明らかにし、文化振興の指針を示した。文化振興ビジョンにおける 3 つの基本目標の一つに「創造都市・浜松の実現」という項目が設定され、施策の方向性として(1)創造的文化・芸術活動を行うアーティストへの支援 (2)文化・芸術活動を支える組織や人材の支援 (3)拠点施設の整備と活用 (4)文化・芸術のマーケティング強化 が挙げられている。具体的には、(1)に関連して「自由度の高い練習施設やアーティストの創作活動や交流の拠点となるアー

<sup>21</sup> 2019 年 11 月 1 日現在：住民基本台帳による。

トセンター機能を有する施設の整備について検討」することや、(3)に関連して「旧浜松銀行協会<sup>22</sup>など、都市の記憶を伝える既存施設のリノベーションやコンバージョンによる整備と活用」を行なう方向性などを示している。また、創造拠点地区の形成を目指し「浜松駅から旧浜松銀行協会に至るエリア<sup>23</sup>を、モデル事業の展開によりギャラリー、ライブハウス等の文化産業やコミュニティアート活動が集積し、商店街とも連携して多くの市民が集まる賑わいの拠点としていく」方針を打ち出している。そして、このビジョンにおいては基本目標に向けた推進体制の一つとして「文化施策の検証と評価」を行なってゆく方向性を示しており、定量評価と定性評価を組み合わせる評価を実施することやそれぞれの施策や事業について適切な評価の方法を確立してゆく方針を記している。

2013年には『「創造都市・浜松」推進のための基本方針』が策定された。この基本方針には同市の目指す創造都市の姿について「浜松のものづくりや音楽、多文化共生などの根底にある“やらまいか精神”“柔軟で寛容な市民性”が、まちづくりや暮らしに広く活かされていく」「市民が常に新しい試みにチャレンジし、次々と新しい価値を生み出していく」「創造的な人材や企業が集積し、日常空間を創造空間(魅力的な都市空間)に変え、市民の暮らしに刺激を与えていく」という3つのイメージを示している。前向きに物事に取り組む「やらまいか精神」と称される浜松の市民風土や工業で発展してきたものづくり文化、楽器産業の集積から発展させた音楽文化の振興、外国人市民が多く居住している地域性を生かした異文化交流など地域の強みを反映させた都市イメージとなっている。この基本方針には同市を創造都市へと牽引すると考えられるプロジェクトの例が提示されており、多様な取り組みの計画が示されている。それら多様な取り組みの中に「アートセンター機能の充実」や「アーティスト・イン・レジデンス事業」が挙げられている。

しかし、文化芸術の取り組みが充実した豊かな暮らしのイメージを掲げる一方で、現状はイメージの実現にほとんど至っていない。90年代に整備した大規模な文化施設においてオペラやオーケストラなどレベルの高い公演の鑑賞機会を充実させているが、浜松市に固有のプロの音楽団体はなく、他所から買ってくる公演が中心であり、ハードを活用した浜松市ならではのソフト事業という面では力が弱い。表2-3は国勢調査(2015)を元に20の政令指定都市における芸術家<sup>24</sup>の数をまとめた表である。音楽文化の振興を掲げる浜松市において職業分類「23 音楽家、舞台芸術家」の数が非常に少ない様子が読み取れる。また、15歳以上の就業者数1万人あたりの芸術家の数をランキング化して表2-4にまとめた。20の政令指定都市の中で就業者数1万人あたりの芸術家の数は19位であり、浜松市が抱える芸術家の数は他の政令指定都市に比べて少ない状態にあることが分かる。このように市

<sup>22</sup> 中村與資平によって設計され、1930年(昭和5年)に「浜松銀行集会所」として建てられた。2004年に協会の役割を終えて浜松市に譲渡され、2009年に浜松市指定有形文化財に指定された。現在は浜松市出身の映画監督・木下恵介の記念館と中村與資平資料室として活用されている。

<sup>23</sup> 駅前繁華街から鴨江小路に続くエリアを指す。

<sup>24</sup> 本研究では「平成27年国勢調査」の就業者の産業(小分類)における「21 著述家、記者、編集者」「22 美術家、デザイナー、写真家、映像撮影者」「23 音楽家、舞台芸術家」に分類される人数を芸術家の数とした。

内に抱える芸術家の数が少ないことは明らかであり、外部から芸術家を取り入れる必要性を指摘することができる。浜松市は楽器産業の集積が特徴的な街でありユネスコ創造都市ネットワークに音楽分野で加盟していることもあって音楽文化の振興に注力しているが、「創造都市」とは多様性に富んだ空間であり、音楽以外の文化芸術の多様性も都市に欠かさない要素である。文化振興ビジョンに掲げられた創造拠点・エリアの形成は未だ十分に結実しておらず、ギャラリーやライブハウス、アート活動の集積に大きな変化は見られない。産業構造においては製造業が多くの割合を占める状態が続いており、文化関連産業の成長はまだ芽を伸ばしていないのが現状である。

同市における文化芸術に関わる評価制度としては、指定管理制度を導入している公の施設について施設の管理運営に係る内容を中心に第三者委員による外部評価が行われており、点数化された評価結果は公開されている。しかし、計画や事業について効果や成果を測る調査や検証は行われておらず、文化振興ビジョンに示された評価の指針は実現していないことが分かる。このような評価制度の現状は浜松市に限らず多くの自治体でも同様の状況であると考えられる。

次節では『「創造都市・浜松」推進のための基本方針』（2013）に提示されているプロジェクトの中でも特に「鴨江別館を活用したアートセンター機能の充実」と「アーティスト・イン・レジデンス事業の実施」の2項目について詳しく論じていきたい。

## 第2節 多様性を受け入れ創造性を高めるアートセンターという場の活用

### 2-2-1. 浜松市鴨江アートセンター

浜松市鴨江アートセンターは1928年(昭和3年)に建築された浜松警察署庁舎を活用して設立された文化施設である。浜松駅から徒歩10分程の浜松市中区鴨江町1番地に位置し、文化振興ビジョンに掲げられた創造拠点地区「浜松駅から旧浜松銀行協会に至るエリア」内に立地する。鉄筋コンクリート造地上3階建ての建物で、延床面積は1,334.68㎡となっており、部屋数は合計11部屋<sup>25</sup>である。東南海地震(1944年)や第二次世界大戦中の浜松空襲(1945年)をくぐり抜けた貴重な建造物である。1971年に警察署としての機能は役割を終え、1972年に静岡県から浜松市へ所有権が移管された。1974年に大規模改修が行われ、「浜松市社会福祉会館」として利用された。1984年に音楽練習などに対応するため改修がなされ、「浜松市鴨江別館」と改称し市民による活動の場となった。2001年には、予測される東海地震に対する耐震性など建物の老朽化を理由に解体の方針が決まったが、2008年に浜松市は市民による保存運動を受けて耐震工事を行なった上での建物の保存と活用の方向へ転換を決めた。そして2013年、「浜松市鴨江アートセンター」と名称を改め、指定管理者の公募の結果一般社団法人浜松創造都市協議会・東海ビル管理グループが選定

<sup>25</sup> 全11部屋のうち貸室は7部屋、アーティスト・イン・レジデンスのレジデンスルーム(工房)が4部屋となっている。



された。この時の指定期間は 2013 年 11 月 1 日から 2018 年 3 月 31 日までの 5 年であり、同団体は現在 2 期目の指定管理にあたっている。なお、指定管理の更新にあたって、同市は浜松市鴨江アートセンターと旧浜松銀行協会(木下恵介記念館)の一体運営を目指して仕様書を変更し公募を行った。そのため、現在同団体は両館を機動的に活用して事業を展開している。スタッフの構成は両館合わせて館長、副館長、常勤職員 4 名、非常勤職員 9 名となっている<sup>26</sup>。

政策上の位置付けとしては、浜松市の『「創造都市・浜松」推進のための基本方針』(2013)の中に示される「浜松市を創造都市へと牽引するプロジェクト」のうち(1)新たな発想を喚起する創造空間の演出、(2)創造性あふれる市民活動の促進、(5)創造都市ネットワークを軸とした発信・交流・連携 の分類の中に「鴨江別館<sup>27</sup>を活用したアートセンター機能の充実」という項目が挙げられている。同施設はアーティスト・クリエイターが活動しやすい場であり、かつ市民にも活動の機会・場を提供する施設であることが求められている。また、コーディネート機能の充実やアーティスト・クリエイターの活動に触れる機会の拡大、国内における発信強化と交流促進など、人と人、活動と活動の架け橋となる機能も要請されている。

浜松市鴨江アートセンターは貸室と年間 50 本の指定事業、アーティスト・イン・レジデンス事業の 3 つの事業が中心となっている。貸室は市民の文化活動の練習・発表の場となっており、吹奏楽や合唱、演劇など様々な利用がなされている。ロビーは広く市民に開放されており自由に集う場所となっている。最近は市内在住外国人の貸室利用も増加し、実に多様な人々が訪れる場となっているといえる。公益財団法人浜松国際交流協会(HICE)と連携して実施した多文化共生に関わるアートイベント(イベント名「ゆれるアイデンティティ」2019 年 4 月実施)や浜松市主催の音楽イベント(イベント名「サウンドデザインファクトリー」2019 年 12 月実施)の会場として利用されたこと、他の機関との連携や協働もなされている。年間 50 本の指定事業においてはアーティストや専門家をファシリテーターに招いて造形ワークショップやトーク等多様な内容の取り組みが行われている。子供の自由な創造性を発揮させる事業や公益財団法人静岡県舞台芸術センター(SPAC)と連携した事業、高齢者向けのアウトリーチ事業など企画は様々である。また、アートセンターへ訪れる人の層を広げる目的で定期的に朝市が開催されており、それに合わせて食に関連するワークショップも実施されている。アーティスト・イン・レジデンス事業については次項で詳しく述べるが、アーティストの活動を支援する取り組みとして過去 5 年以上実施されてきた<sup>28</sup>。近代建築を活用した同施設は浜松市民の文化芸術活動やコミュニティの場と

<sup>26</sup> 清掃やメンテナンス等に関わるスタッフは除く。

<sup>27</sup> 「浜松市鴨江アートセンター」に名称を改める前の呼び方である。

<sup>28</sup> 同施設では浜松市鴨江アートセンターとして指定管理が始まる以前の「鴨江別館」の頃から試験的にアーティスト・イン・レジデンスが実施されていたが、本研究では指定管理者制度導入後のアーティスト・イン・レジデンス事業を取り扱う。

して機能し、アーティスト・クリエイターの活動を支える創造都市政策推進拠点と位置付けられる。

## 2-2-2. アーティスト・イン・レジデンス事業

同市における基本方針(2013)の中において「アーティスト・イン・レジデンス事業の実施」は(1)新たな発想を喚起する創造空間の演出 の分類における「アーティスト・クリエイターが活動しやすい環境づくり」として実施される事業でありながら、(2)創造性あふれる市民活動の促進「アーティスト・クリエイターに触れる機会の拡大」における事業としても位置づけられている。政策上の位置付けにおいてアーティスト自身の成長や制作場所の獲得もさることながら地域や市民への効果の還元が求められていることが分かる。浜松市鴨江アートセンターで行われているアーティスト・イン・レジデンスは、仕様書に「アートセンターの工房機能(2階4部屋)を活用して創作過程の公開及び展示会やワークショップ等への事業協力を前提として活動できるアーティストやクリエイターを、年1回以上公募により選定し、工房を創作場所として無償貸与すること」と記載されており、施設への協力を前提としたアーティスト・イン・レジデンスの実施が求められている。そのため、応募条件の中にも「滞在期間中に何らかの方法(展示、ワークショップなど)で成果発表することができる」「地域との交流に取り組むことができる」「滞在期間中に鴨江アートセンターの事業に協力することができる」等の内容が盛り込まれており、地域や施設に対する目的が要請されている側面を指摘することができる。このことから、同施設におけるアーティスト・イン・レジデンスは日本型アーティスト・イン・レジデンスの特徴に当てはまる事例といえるだろう。しかし、同市におけるアーティスト・イン・レジデンスはビジョンや目的が明文化されていないため現場の裁量に委ねられるところが大きく、実際には職員が手探りの状態で事業を進めている状況となっている。

同施設におけるアーティスト・イン・レジデンスにおいては、一年を4ヶ月ずつ前期と後期に分け、それぞれの期ごと4組、年間合計8組のアーティスト・クリエイターがレジデンスアーティストとして採択される。選考委員<sup>29</sup>によって構成された審査を経て採択されたアーティスト・クリエイターは同施設2階の広さ20㎡の制作室を1部屋ずつ提供され、部屋を自由に使用することができる。また、年度ごとに1組を「鴨江アートセンターアーティスト・イン・レジデンス賞」に選定し、受賞者は翌年度に同施設において発表を実施することができる。しかし、宿泊施設は併設されておらず、交通費、渡航費、滞在費、食費などの補助も無い<sup>30</sup>ため、支援体制の弱さは否めない。

<sup>29</sup> 同施設の館長、副館長と、アーティスト・イン・レジデンス事業運営経験のある東京藝術大学教授の3名によって構成されている(2020年度の募集について)。

<sup>30</sup> 制作費に限り上限2万円の補助が出される。「鴨江アートセンター アーティスト・イン・レジデンス賞」に採択された年間1組のアーティスト・クリエイターは発表費用として上限7万円の補助がなされる。

同施設におけるアーティスト・イン・レジデンスは「絵画、写真、映像、工芸、彫刻、デザイン、メディア、建築、音楽、ファッション、その他アートプロジェクトなどの分野で、個人またはグループで制作、活動している」ことが条件であり、募集アーティストのジャンルに特に制限はない。そのため、応募者の制作ジャンルは多岐に渡り、これまで絵画や彫刻、写真、演劇、作詞、電子楽器の制作、ライブパフォーマンス等多様なアーティスト・クリエイターを招聘してきた。また、国籍にも基本的に制限はなく条件に「日常的な会話のやりとりが日本語または英語でできる」と記載されているのみである。コミュニケーションを取るための最低要件を満たせば外国人の応募も可能である。これらの条件をもとに公募を実施し、現在までの招聘アーティスト・クリエイターは延べ 47 組となる<sup>31</sup>。

同施設においては現状復帰を前提として壁に描くことが可能であったり、飲食が可能なことからカフェスペースを展開することができたり、非常に自由度の高い制作や活動ができる点が特徴的である。また、2018 年 4 月より浜松市鴨江アートセンターの向かいの旧浜松銀行協会(木下恵介記念館)も指定管理で一体経営するかたちとなったため、有形文化財に指定されている建物内での展示について参加アーティストの希望があれば機動的に対応することができる体制となっている。

---

<sup>31</sup> 2014 年度から 2019 年度までの組数。年間合計 8 組のアーティストを招聘しているが、2016 年度に通年で採択されたアーティストがいたため 47 組となっている。この中には外国籍のアーティスト 2 組も含まれる。

### 第3章 評価システムの構築

#### 第1節 研究方法と研究の流れ

本研究のフローは図 3-1 に示されている。本研究において、筆者はまず浜松市鴨江アートセンターにて参与観察<sup>32</sup>を実施し、実際にアーティスト・イン・レジデンス事業がどのように運営されているかについて詳細な観察を行なった。また、アーティスト・イン・レジデンス事業に限らず他の事業の運営や施設全体、職員の様子も併せて観察対象とした。参与観察を通して事業の PDCA サイクルを回す体系的なシステムが確立していないことが重要な課題として認識された。現状として、予算や時間などの制約から「仕様書通り」に事業を回す文化が定着しつつある。職員の取り組み内容や実際に事業を実施してみた結果・成果を評価したり共有したりする制度が無いため、毎年度ただ繰り返す事業として形骸化していく恐れがある。このような実態は同施設に限らずわが国全体の公の施設で当てはまる課題であろう。有識者などを取り入れた評価の実践事例は少しずつ蓄積がなされてきているものの、大規模な芸術イベントに関連したものがほとんどである。大規模芸術イベントは長期に渡る準備期間が設けられていたり評価のための時間や予算等を準備できたり比較的條件が整っている。一方で、このような条件の整っていない多くの文化芸術事業について予算や人員、時間等の現場の制約を踏まえた評価システムの構築が必要である。

2018 年 12 月に開催された 2018 年度第 2 回アーティスト・イン・レジデンス研究会<sup>33</sup>においても評価がテーマとして設定されており、研究会の中では「ピア・レビュー<sup>34</sup>」の導入などが提案された。研究会の動きから、評価に関する議論が近年アーティスト・イン・レジデンス事業関係者にとっても関心の高いトピックとなっていることが分かる。

創造都市政策としてのアーティスト・イン・レジデンスの評価を行うためには、評価の土台となるロジックモデルが必要である。評価のためのロジックモデルとは、政策目標と事業との繋がりを理論的かつ視覚的に説明するツールである。札幌国際芸術祭や六本木アートナイト、静岡市におけるフェスティバル評価システムの構築業務など、わが国における評価の実践事例においても評価のためのロジックモデルが検討されてきた。したがって、本研究においても創造都市政策としてのアーティスト・イン・レジデンスの評価を行うためにロジックモデルの構築を行う。ロジックモデルの作成プロセスについては第 2 節で解説する。

次のステップとして作成したロジックモデルを元に指標と調査項目を設計する。指標の項目はそれぞれロジックモデルに示す項目に対応するように作成する。

<sup>32</sup> 浜松市鴨江アートセンターにて 2018 年 7 月より非常勤職員としてアーティスト・イン・レジデンスの広報業務や成果発表展示の設営など実際の業務に従事しながら観察を行なった。また、参与観察中はアーティスト・イン・レジデンス事業の他に貸室の事務やイベントの補助など、同施設の事業運営に全体的に携わった。

<sup>33</sup> 国内のアーティスト・イン・レジデンス事業の運営者や実務家が集まって情報交換を行ったりネットワークを作ったりする場である。2018 年 12 月 11 日(火)、12 日(水)に滋賀県立陶芸の森で開催され、筆者はオブザーバーとして参加した。2018 年度の第 1 回目は 2018 年 9 月 23 日(日)、24 日(月)に女子美術大学で開催。

<sup>34</sup> ここでの「ピア・レビュー」とはアーティスト・イン・レジデンス関係者による同僚評価のことを指す。同じ事業に携わる者同士で評価し合うことで、より現場の運営に効果的な示唆が得られる可能性がある。

その後、作成したロジックモデル、指標、調査項目を元に実際に浜松市鴨江アートセンターのアーティスト・イン・レジデンス事業を事例として調査を実施し、評価結果を示す。このプロセスを以降「評価の試行」と呼称する。しかし、この評価の試行を経て得られた評価結果そのものは本研究の結論となるところではない。

次の段階として、評価の試行結果を元に評価システムの妥当性を測る調査を行う。政策のイニシアチブを取る行政と現場の事業運営者に対して評価システムと評価の試行結果をフィードバックし、それぞれの立場における評価結果の活用法や運用可能性について聞き取り調査を実施する。また、その際に本研究で開発した評価システムの運用上のポイントなども明らかにし、改善を加えて実際の運用に即した評価システムを構築していく。このように、作成した評価システムに対して精査を行う研究プロセスを設けることで、より適切な評価のあり方を明らかにする。

## 第2節 評価システムの開発と試行

### 3-2-1. ロジックモデルの構築

本研究では、評価システムの基礎となるロジックモデルを作成した。ロジックモデルの構築に際して最も参考にした実践事例が札幌国際芸術祭 2014 事業評価検証会 (2016)<sup>35</sup>である。札幌国際芸術祭の事例においては芸術祭としての評価と行政による文化事業としての評価を大別して評価手法を検討している。ここでは、芸術祭の評価と文化事業の評価の軸を分けることでそれぞれの評価を混同しないように配慮している点に大きな特徴がある。行政による文化芸術事業の評価はしばしばそれら別軸の指標を一つの軸で捉えがちであるが、この点を明確に分けることで適切な文化芸術事業としての評価が実現する。そのため、本研究においても札幌国際芸術祭の実践事例を参考に創造都市政策としてのアーティスト・イン・レジデンス事業を「文化芸術事業としての評価」と「芸術面の評価」の2つに大別して捉えてゆく。文化芸術事業としての評価の指標となるのは事業実施による市民のアート活動への参加機会の充実や事業運営にあたる職員のスキル向上などが挙げられる。芸術面の評価に当てはまるのはレジデンスアーティスト自身の成長や経歴としてのステップアップなどである。本研究においては上記の2つの評価軸に大別した上で、「文化芸術事業としての評価」に特に焦点をあてる。

作成したロジックモデルは図(3-2)である。図の下段からインプット、アウトプット、アウトカム、中長期的な効果、というようにボトムアップ式に事業の効果が政策目標に繋がってゆく流れを示している。図上部の政策目標は一般的に語られる創造都市のイメージと

<sup>35</sup> 札幌国際芸術祭 2014 事業評価検証会による評価の実践事例である。札幌国際芸術祭の実施主体である創造都市さっぽろ・国際芸術祭実行委員会は外部有識者による札幌国際芸術祭 2014 事業評価検証会に対して事業を適切に評価する検証作業を依頼し、検証会は評価基準やロジックモデルなどを作成した。検証会は事業評価を実施するにあたり、札幌市内関係者に対して事業実施後の追跡調査としてヒアリング及びアンケートを実施している。

なっており、「多様性を受け入れる風土の醸成とクリエイティブ人材の集積」は創造都市の目指す都市イメージに普遍的に通じると考えられる。ここで注意したい点は、創造都市の実現に向けて多くの施策や事業の実施がなされており、決してアーティスト・イン・レジデンスの実施によってのみ創造都市が実現するものではないという点である。したがって、ロジックモデルの右に示す矢印の流れは、創造都市の政策目標に対してアーティスト・イン・レジデンス以外のその他多くの事業の存在を表している。また、札幌国際芸術祭の事例を参考に本研究でも評価軸を「文化芸術事業としての評価」と「芸術面の評価」とを大別する意図を示すため、ロジックモデルの左にアーティスト・イン・レジデンス実施による芸術界への効果を破線で表している。ロジックモデル全体を概観した際に、実線や塗りつぶしの矢印で繋がった流れが「文化芸術事業としての評価軸」となっている。

次に、ロジックモデルの流れについて解説してゆく。「インプット」は「事業の実施のための投入」であり、アーティスト・イン・レジデンス実施にかかる人、予算、場所、時間等の投入の段階とした。「アウトプット」は「事業の実施によってうまれる成果」と設定し、アーティスト・イン・レジデンスを実施する毎に発生する成果を指標としている。アーティストがやってきて作品を制作し、発表するという、成果発表を求める傾向にある日本型のアーティスト・イン・レジデンスの一般的な実施の流れに沿って指標を作成している。アーティスト滞在の間の地域との交流や職員との交流も創造的な刺激のやりとりであると考えられるため、「交流」についても指標を考案した。「アウトカム」は「事業の実施によって達成する効果」であり、事業の継続により蓄積されたアウトプットから発生すると予想される効果をさす。事業を継続実施することによって様々な芸術作品が発表され、またそれらに触れる機会も充実することで、地域の人々に対して多様な芸術のあり方の提案がなされていくと推測される。ここでの地域の人々とは、大きく「市民」「地元クリエイティブ人材」「運営スタッフ」の3つに分けられる。

本論における「地元クリエイティブ人材」とは、地域に在住するエンジニア、建築家、デザイナー、教育者、アーティスト、職人等をさす<sup>36</sup>。Florida(2002)は「クリエイティブ・クラスと他の階層とを分ける重要な違いは、報酬を何から得ているかということである」と述べているが、わが国では収入構造などが必ずしもクラス(階級)に当てはまらないクリエイティブ人材がいる<sup>37</sup>。そのため、本研究では特にアーティストについて「芸術に関する高等教育を受けた」者をクリエイティブ人材として設定した<sup>38</sup>。また、運営スタッフの中でも特にアーティスト・イン・レジデンス事業運営の「担当職員」は文化芸術事業における

<sup>36</sup> 地元クリエイティブ人材の構成には地域ごとに特性があると考えられ、例えば浜松市はメーカー勤務のエンジニアなど「ものづくり人材」が多く住んでいる点が特徴的であり、金沢市においては伝統工芸に関わる職人などの比率が特筆されるだろう。

<sup>37</sup> アーティスト活動などと並行して収入を得るための仕事をしている場合を指す。

<sup>38</sup> クリエイティブ・クラスは活動において「相当量の独自の判断や、高等教育が必要となる」としたFlorida(2002)の指摘に拠る。

専門職であり、クリエイティブ人材として位置付けることが可能である<sup>39</sup>。アーティスト・イン・レジデンスの継続実施によって市民は多様な芸術に接する機会を享受し、芸術文化における選択肢の幅の広さに触れることができる。地元クリエイティブ人材に対するアウトカムは、レジデンスアーティストとの出会いや交流の蓄積によってクリエイティブな刺激を受け取ることである。運営スタッフに対するアウトカムは、現場のアートマネージャーとしてのスキル向上に効果があると考えられる。これらの予想されるアウトカムの次の段階は「中長期的な効果」である。この段階は事業継続10年程度を想定しており、「アーティスト・イン・レジデンスが創造都市政策の一部として機能を果たす」状態として予想される効果を示している。中長期的な段階における効果は「地元クリエイティブ人材への効果」「市民への効果」「事業実施主体への効果」の3つに整理しているが、これらは互いに排他的ではなく、関わり合って効果を生んでいる。そのため図において3つの効果について破線で結びつけている。また、中長期的な段階における効果はそれぞれ循環を生むことで創造都市の実現により近づくと考えられるため、図3-3-①から図3-3-③に中長期的な効果の循環モデルを示した。

このロジックモデルでは、市民への効果もさることながら、アーティスト・イン・レジデンスの実施による地域のアーティスト、デザイナー、クリエイター、技術者、アートマネージャー等の創造都市におけるクリエイティブな人的資源に対してその創造性を伸ばすことへのアプローチに特に着目している。このロジックモデルが創造都市を目指す都市において実際にその目標や方向性に寄与できるものとなっているかについての検証は、第4章で浜松市に対するヒアリング結果と考察を述べる。

### 3-2-2. 評価のための指標の設計

評価を行うためには評価基準となる指標の設定が必要である。本研究においても創造都市推進政策としてのアーティスト・イン・レジデンスを評価するための指標を設計した。アーティスト・イン・レジデンスの応募資料等の文献調査における指標は表3-1-①にまとめた。また、ロジックモデルを元に調査対象である「担当職員」の指標と調査項目を表3-1-②に、「レジデンスアーティスト」の指標と調査項目を3-1-③に、「地元クリエイティブ人材」の指標と調査項目を3-1-④に、「市民」の指標と調査項目を3-1-⑤に整理してある。評価の試行においてはレジデンスアーティストや職員などに対するインタビュー調査から得られる質的データと応募資料の量的データを適切に組み合わせて評価を行う狙いがある。なお、本研究における調査では条件的・時間的制約から「市民」への調査は実施していない。

<sup>39</sup> その際、アーティスト・イン・レジデンス事業運営担当者の職歴や学歴も考慮する。

### 3-2-3. 浜松市鴨江アートセンターにおける評価の試行

作成したロジックモデルと評価指標が現実的に機能し得るシステムとなっているか検証するため、浜松市鴨江アートセンターで実施されているアーティスト・イン・レジデンスを事例に評価の試行を実施した。今回は条件的・時間的制約から「市民」を除く「レジデンスアーティスト」「担当職員」「地元クリエイティブ人材」を対象としてインタビュー調査を実施した<sup>40</sup>。また、応募資料について定量的データも収集した。調査結果について次章に記す。

## 第3節 評価システムの妥当性の検証と改善

### 3-3-1. 試行結果を元にしたインタビュー調査(浜松市・事業実施主体)

本章第2節 3-2-3 で示したステップにおいて得られた結果を元に、施設の設置者である浜松市<sup>41</sup>と指定管理を受託する事業実施主体に対してインタビュー調査を実施した。まず、浜松市に対して本研究において開発した評価システムと自治体政策目標との整合性や、毎年度評価を継続していくとした時の結果の蓄積の政策的活用法などについて聞き取りを行った。次に、事業実施主体である一般社団法人浜松創造都市協議会に対して浜松市鴨江アートセンター館長と事業担当職員をインタビュー対象として現場における評価結果の活用法や評価の運用可能性、実務的な課題などを調査した。

### 3-3-2. 評価システムの再検討

上記のインタビュー調査から明らかになった評価システムの課題や改善点を踏まえて実務的な運用に即した評価システムを再検討し、創造都市政策としてのアーティスト・イン・レジデンスの評価の適切なあり方の一つを明らかにする。

<sup>40</sup> インタビュー対象とした「担当職員」や「地元クリエイティブ人材」の位置付けについては第3章第2節 3-2-1 で詳細を述べているため、本稿 pp. 20-21 を参照されたい。

<sup>41</sup> 浜松市鴨江アートセンターの所管課は浜松市市民部 創造都市・文化振興課である。



## 第4章 評価の試行結果

評価の試行として、浜松市鴨江アートセンターを事例に、応募資料を元にした文献調査と、レジデンスアーティスト、担当職員、地元クリエイティブ人材に対するインタビュー調査を行なった。以下に応募資料の調査結果とインタビュー調査の結果を示す。

### 第1節 定量的調査—アーティスト・イン・レジデンス応募資料等をもとにした文献調査

資料 C-1 と資料 C-2 は浜松市鴨江アートセンターにおけるアーティスト・イン・レジデンスの応募用紙の書式である。この書式に記入された情報を定量的に把握するため調査を行なった。以下①から⑥の調査結果より得られたデータは、ロジックモデル(図 3-2)に示す「アウトプット(広報・募集・選定)」の項目にあたる。

#### ①応募数の推移

採択数に対する応募数を調査することにより、レジデンスアーティストの適切な選考プロセスの実現や年度ごとの広報業務の数字としての成果を測ることが可能である。

浜松市鴨江アートセンターにおけるアーティスト・イン・レジデンスは2019年度の実施で6年目となっており、応募数は計117件<sup>42</sup>である。年度ごとの応募数は初年度を除き2015年度から2018年度にかけて増加傾向にある(図4-1)。2019年度の実施は少なかったが、広報や募集の時期・期間が例年と違ったためであると考えられる。しかし、年間採択数8組の条件に対して応募数が下回ったことはこれまで無く、公募に対して選考のプロセスを経てレジデンスアーティストを決めるという流れは毎年度実現している。

#### ②応募者の年齢層

図4-2-①は応募者2014年度から2019年度までの応募者の年齢層を示している。ここでの調査は、応募者の年齢的多様性が実現しているかを測る。

浜松市鴨江アートセンターにおけるアーティスト・イン・レジデンスは公募に際して年齢制限を設けていない。そのため、20代から30代の若手と40代の中堅がほとんどの割合を占めているものの、応募者全体の年齢は10代から60代以上まで幅広い。多様な年代から応募がなされていることが読み取れる。図4-2-②は選考を経た採択者の年齢層を示しており、30代が比較的中心となっていることが分かるが、年度によって多様な年齢層が構成されている。

<sup>42</sup> 同一人物からの複数年度の実施も全て計上している。

### ③応募者の居住地傾向

文化芸術事業としてアーティスト・イン・レジデンスを捉える際、外部人材の取り入れが大きな特徴の一つとなり、特に芸術家の数が少ない工業都市においては外部のクリエイティブな人材を取り入れられることに事業実施の意義があるだろう。そのため、応募者の居住地の傾向を調査項目とした。

応募者の応募時点の居住地を「市内」「市外(県内)」「市外(県外)」に分類しグラフにしたものが図 4-3 である。「市内」からの応募者が多い点が非常に特徴的であり、その割合は常に 50%以上である。市内のアーティスト・クリエイターの応募が多いことから同施設が地域の人材に対して制作場所や発表の機会を提供する機能を担っているということが読み取れる。また、同施設におけるアーティスト・イン・レジデンスは宿泊場所の提供が無かったり、交通費や渡航費の支給が無かったりと厳しい条件になっており、市内に滞在拠点を持たないアーティスト・クリエイターが応募する際にハードルが高い状況になっているために市外の応募者が少ないことが予想される。しかし、近年は「市外(県外)」からの応募者も増加傾向にあり、採択されるアーティスト・クリエイターにも県外居住者が見られるようになってきた。このことから、同施設のアーティスト・イン・レジデンスの全国的な知名度の向上や県外在住のアーティスト・クリエイターを惹きつける何らかの魅力があることが示唆される。外部人材との異文化交流による創造的な刺激の交換が行われることは、都市に多様性をもたらすという点で創造都市の実現に貢献する側面があるだろう。彼らは浜松市内のシェアハウスなどを利用して滞在しており、滞在先で新たな交流が生まれるなどポジティブな影響も見られる。

### ④国籍

国籍の多様性も創造都市の要素の一つである。表 4-1 は年度ごとの応募者の国籍を日本国籍と外国籍に分けて表にまとめたものである。

外国籍の応募者が0の年もあるが、ほとんどの年で1人以上の外国籍応募者が見られる。また、調査の結果外国籍応募者のほとんどは市内在住者であることが分かった。同施設におけるアーティスト・イン・レジデンスは渡航費や滞在費の補助がないため外国からアーティスト・クリエイターを招聘することのハードルが高い一方で、地域内でクリエイティブな活動をしている外国人をレジデンスアーティストとして取り入れてゆくことの可能性が見出せる。浜松市は在住外国人の多さが特徴的であり、その多様性を文化芸術面に生かしてゆく可能性にも注目できるだろう。しかし、外国籍のアーティスト・クリエイターの採択の実績としては 2015 年度と 2019 年度のみであり、外国人を取り入れることで生まれる多様性はまだまだ実現していない状況である。

#### ⑤募集を知ったきっかけ

浜松市鴨江アートセンターにおけるアーティスト・イン・レジデンスの募集を知ったきっかけについて、応募資料を調査して図にまとめた(図 4-4)。①の調査に関連し、応募につながった広報媒体の傾向を調査することで広報業務の具体的な成果を測る意図がある。

項目の凡例を解説すると、「チラシ」はアートセンターがアーティスト・イン・レジデンスの募集のために作成・配布するチラシを指している。「HP」は浜松市鴨江アートセンターのホームページのことであり、「SNS」はアートセンターが情報発信に使用している Facebook、Twitter のいずれかのことである。「アートセンター」はアートセンターの職員経由で情報を得ることや、アートセンター内の掲示等を見るなどのきっかけを指す。「知人から」は家族や知り合いから情報を得たというきっかけを指している。また、この「知人から」の中には過去のレジデンスアーティストから口コミを得るなどのきっかけも含まれている。「その他」の項目は浜松市の広報誌「広報はままつ」や新聞、AIR\_J など外部の情報機関を通して情報を得た場合などを指す。

浜松市鴨江アートセンターにおけるアーティスト・イン・レジデンスが開始された当初 2014 年度は応募者を募集するために職員がアーティストに直接声を掛けることがあり、「アートセンター」の割合が高くなっている。しかし、近年その割合は減少傾向にあり、「チラシ」や「HP」などの割合が増加していることから、広報の取り組みの成果が上がってきていることが分かる。「チラシ」から当該事業を知った応募者の中には、「アートルボあいち」や「福岡アジア美術館」でチラシを見たという人もいた。全国の文化施設に向けてチラシを発送している効果が表れていることが示唆される。また、2019 年度に割合を多く占めた「知人から」の項目には「過去のレジデンスアーティストから紹介されて」「知り合いが過去にアートセンターで滞在制作をしていて」等の記述が見られ、同施設におけるアーティスト・イン・レジデンスの参加者が口コミや体験談を広めていることが推測される。

#### ⑥応募理由

応募書類に記入された応募理由から、アーティスト・イン・レジデンス応募者の応募動機を調査した(図 4-5)<sup>43</sup>。調査の結果、同施設におけるアーティスト・イン・レジデンスの応募理由は大きく「制作場所を求めて」「場所の特性に惹かれて」「自らの表現の追求」「挑戦として」「交流」「その他」に分類できることが明らかになった。中でも「制作場所等を求めて」という理由が最も多い結果となった。詳細を見てゆくと、制作場所や作品発表の場所を確保する目的であったり、大きい作品を制作するためにアトリエを必要としたりといった動機が挙げられていた。次に多い理由が「場所の特性に惹かれて」「自らの

<sup>43</sup> 応募理由の調査においては、複数の理由を述べている場合について文章量や記述されている理由の順番などから応募者の最も強い理由と考えられる項目を調査した。

表現の追求」の2項目であった。浜松市鴨江アートセンターは随所に当時の面影を残す近代建築であり、このような場所の特性を理由に挙げる応募者が多く見られる。また、4ヶ月間の集中的な作品制作を通して、自らの表現力を高めたり新たな表現方法を獲得したりしたいという理由もあった。「挑戦として」を応募理由に述べた応募者は、実験的なことに取り組む姿勢や滞在制作への初挑戦の意気込みを記していた。一方で、「交流」を目的に挙げた応募者は滞在制作中の他のレジデンスアーティストや地域との交流に期待を示している。

## 小括

ここまで、浜松市鴨江アートセンターにおけるアーティスト・イン・レジデンスの応募資料をもとにした文献調査の結果についてまとめてきた。まず、応募者の年齢層は10代から60代以上まで幅広く、採択されたアーティスト・クリエイターは30代を中心とする10代から40代の層が厚く、年度によって50代60代以上の参加者もいることが確認された。創造都市政策としてのアーティスト・イン・レジデンスを評価する上で、年齢的な多様性が担保されていることが明らかとなった。居住地の傾向においては、市内在住者が毎年多くの割合を占めているものの、市外・県外在住者の応募が増加傾向にあることも確かである。これまでの事業継続によって国内の認知度や発信力が高まってきていることが読み取れる。浜松市鴨江アートセンターの業務の成果として、チラシ作成・配布やホームページの更新など広報活動が成果を伸ばしていることが明らかである。一方で、国籍的な多様性はまだ実現していないが、クリエイティブな市内在住外国人の受け入れ可能性などが示唆される結果となった。

また、調査を通して過去のレジデンスアーティストが同施設のアーティスト・イン・レジデンスを広めていることが明らかになり、参加アーティストが当該事業に対して何か評価できる点や良い印象を見出したのではないかと推測される。この点について具体的な内容を把握するには至らなかったが、参加アーティストから周りの人々へ口コミや体験談によって事業が広められることは事業の成果・効果として評価できる点であると考えられる。なぜなら、クリエイティブな人的つながりをもたらすという点で創造都市の実現に直接的に貢献する事象であると考えられるためである。レジデンスアーティストから他のアーティストへ同施設におけるアーティスト・イン・レジデンスが伝えられ、応募に至るという事実の発見は今回指標として設定していなかった予想外の結果であるが、この結果からアーティスト・イン・レジデンスの実施を通して都市にクリエイティブな人材が惹きつけられているという効果の片鱗が観察される。クリエイティブ人材間における都市のプレゼンスの向上は創造都市の実現に向けて直接的に関わる要素であるため、この指標について今後の変化や具体的な内容を把握していく必要があるだろう。

## 第2節 定性的調査—それぞれの対象に対するインタビュー調査の結果

ここでは、担当職員やレジデンスアーティスト、地元クリエイティブ人材に対するインタビュー調査の結果について示し、分析を行う。指標と調査項目については表 3-1-②から表 3-1-④を参照されたい。分析の段階においては全ての対象に対して「①インプットへの示唆」と「②交流」、「③創造都市政策としてのアーティスト・イン・レジデンス」の分析軸を設定した。「インプットへの示唆」の分析軸は、インタビュー調査から得られた定性的な根拠からロジックモデル(図 3-2)におけるインプットの見直しにつながる点を明らかにする。「交流」の分析軸ではアーティスト・イン・レジデンス実施によるそれぞれの対象間の創造的な刺激の交換の有無や交流の実態を測る。この軸の分析によってロジックモデル(図 3-2)におけるアウトカムの全体的な達成度を測定することができる。「創造都市政策としてのアーティスト・イン・レジデンス」の分析軸は、当該事業が政策目標に対してどのように貢献しているかを測るための軸である。ロジックモデル(図 3-2)における「アウトカム」から「中長期的な効果」について、今回の調査から推定できる範囲で検証を行う。

また、ここでの分析においては、必要に応じて対象ごとの調査結果を照らし合わせて分析を行ってゆく。

### 4-2-1. 職員に対するインタビュー調査

浜松市鴨江アートセンターにおけるアーティスト・イン・レジデンス事業の担当職員 2 名に対してインタビュー調査を実施した結果は資料 E-1 にまとめている。

インタビュー対象である担当職員 2 名<sup>44</sup>は浜松市鴨江アートセンターに勤務以降アーティスト・イン・レジデンスの運営に携わるようになり、それ以前にアーティスト・イン・レジデンス運営の経験はない。両名は他の業務<sup>45</sup>と並行してアーティスト・イン・レジデンスの事業運営を行っており、アーティスト・イン・レジデンスにかかりきりにはなれない状況である。しかし、他の業務にも従事していることで市内のアーティストやクリエイター、エンジニアなど地元クリエイティブ人材とのネットワークが厚いという点は注目できる。筆者による参与観察中、地域のアーティストなどが施設を訪ねてきた際に積極的にレジデンスアーティストを紹介する様子が確認されたことから、表 3-1-②の調査項目Ⅶ-2「交流におけるきっかけづくりに貢献できたか」という問いに対する職員の「市民との交流や人材紹介のつなぎ手となれていると思う」という回答を裏付けることができる。

<sup>44</sup> それぞれ浜松市鴨江アートセンターに勤務して 5 年目と 2 年目の職員である(2019 年 8 月インタビュー時の経歴)。

<sup>45</sup> 浜松市鴨江アートセンターの指定管理を行う上での年間 50 本の事業(ワークショップ、トークイベント、アウトリーチ)、自主事業、貸室事業など。

担当職員は主に事業全体のマネジメントやレジデンスアーティストとのミーティング、広報業務<sup>46</sup>などを行っている。レジデンスアーティストとのミーティングは入居開始時に実施する打ち合せが大きなウェイトを占めており、その後はアーティストから希望があれば都度ミーティングを実施するといかたちをとっている。そのため、定期的なミーティングは実施されておらず、スケジュールや内容は基本的にアーティストに委ねられている。同施設におけるアーティスト・イン・レジデンスは仕様書にその実施を求める旨が記載されるにとどまっており、明文化されたビジョン・目的が設定されていないため、年度ごと「仕様書通り」に事業を実施しているのが現状である。滞在期間終了後にはレジデンスアーティストと職員が振り返りのミーティングを行っているが、その内容を分析したり体系的に共有したりする仕組みは整備されていない。

#### 分析軸：①インプットへの示唆

まず、応募資料の定量的調査「⑤募集を知ったきっかけ」の結果を踏まえてインタビュー調査から分かった広報業務の成果を分析する。ロジックモデル(図 3-2)における「アウトプット(広報・募集・選定の実施)」の項目に該当する指標と調査項目(表 3-1-②)はVI-1からVI-5 である。調査項目VI-1「チラシの送付先を検討する時の工夫」に対して「市内、県内を中心に、全国の文化施設<sup>47</sup>に送っている。全国に送るのは他の施設に対して同施設の存在や活動を伝える意図もある」と回答を得た。同施設におけるアーティスト・イン・レジデンスは宿泊場所を伴わないために市内や県内の施設や団体が送付先の中心となっている。しかし、応募資料の定量的調査「⑤募集を知ったきっかけ」において明らかになったように県外在住の応募者は増加傾向にあり、全国の文化施設に向けて広報を行うことの成果は現れてきている。全国に向けて同施設の存在を知らせる意図を超えて応募が実現しているというデータが得られた。このような結果や、浜松市における芸術家の数が少なさに対する外部人材の取り入れ可能性を踏まえると、アーティスト・イン・レジデンスのインプットの企画段階における事業のビジョンや目的について、今後の方向性に示唆を見出すことができる。

#### 分析軸：②交流

ここでは、ロジックモデル(図 3-2)の「アウトプット(人とのかかわる・その土地を知る)」の項目に関連し、職員とレジデンスアーティストの創造的刺激的交換の状況や職員から見たレジデンスアーティストの地域との交流の状況などの指標に対する値を分析していく。

<sup>46</sup> レジデンスアーティストの募集や成果発表のチラシを作成・発送している。その他、プレスリリースや SNS 発信も行っている。

<sup>47</sup> 全国の文化施設の中でも特にアーティスト・イン・レジデンスを実施しているところ。

同施設におけるアーティスト・イン・レジデンスは、レジデンスアーティストが部屋に入室する際に事務室に立ち寄り、スタッフが鍵の解錠を行う決まりになっているため、常勤・非常勤に関わらずスタッフとレジデンスアーティストが関わる機会が充実している。また、Ⅶ-2「交流におけるきっかけづくりに貢献できたか」という質問に対する回答の一部に「スタッフとの関係も意識している」と述べており、部屋の鍵開けを習慣化することで全スタッフとレジデンスアーティストが関わる機会を意図的に創出している。そのため、担当職員以外のスタッフもレジデンスアーティストと交流する頻度が高く、良好な関係が築けている。施設スタッフ全体がレジデンスアーティストと関わる状況は、多様なアーティストに触れる機会をもたらし、スタッフの寛容性を高める可能性を指摘できる。指標と調査項目(表 3-1-②)の調査項目Ⅶ-1「レジデンスアーティストの交流の様子を観察していたか」という質問に対して、担当職員は「交流の様子などは観察している。レジデンスアーティストによって交流の様子は様々で、2019 年度前期レジデンスアーティストの村上さんのようにアーティスト自身の発信力が強く、アートセンターの外で繋がりが広がっていくということもあった<sup>48</sup>」と述べている。職員がレジデンスアーティストの交流の状況について気を配って観察していることが分かる。

また、レジデンスアーティストと地元クリエイティブ人材のつなぎ手の機能を果たしていることは筆者による参与観察やⅦ-2 の結果から明らかであるため、同施設の職員による交流のハブ機能は創造都市政策に貢献していると捉えることができるだろう。一方で、知り合ったクリエイティブ人材同士のその後のやり取りや交流の度合いなどは検証の必要があり、このことについて 4-2-2. でレジデンスアーティストへのインタビュー調査から実態を分析する。

#### 分析軸：③創造都市政策としてのアーティスト・イン・レジデンス

アーティスト・イン・レジデンスの実施による職員のスキル向上(ロジックモデル(図 3-2)における「アウトカム(運営スタッフのスキル向上)」)は、施設が創造都市政策推進拠点として充実することにつながる。指標と調査項目(表 3-1-②)のⅩ-1「アーティスト・イン・レジデンスの運営を経験してどのようなスキルが身についたか」という質問では、職員による自己評価的なスキル習得状況を調査した。この質問に対して職員は「あまり自覚はない」と回答した上で「強いて言うならばアーティストとの接し方についてノウハウを得た<sup>49</sup>と思う。他の事業でアーティストに接する時に活かしている」と述べた。また、Ⅺ「アーティスト・イン・レジデンスの運営経験は他の事業運営に影響を及ぼしているか」に関する一連の質問の中で担当職員は「レジデンスアーティストがカフェを開いたり壁に絵を描

<sup>48</sup> レジデンスアーティストの村上氏(製本家)は自身の SNS を活用して在室スケジュールや活動を発信していた。ワークショップ(本格的な製本ができる教室)の告知も SNS を活用し、これまで同施設に関わってこなかった人の層や地元のイラストレーターなどの関心を大いに引き寄せた。

<sup>49</sup> 話を聞く役に回り、感想や解釈を伝えることの大事さに気づいたと述べた。

いたりといった実験的な活動を行い、それを目の当たりにすることで、自分の企画の発想に繋がったりアーティストの持ち込み企画に対してアドバイスができたりする」と回答している。この回答から、レジデンスアーティストの活動に伴走することは担当職員にとって非常にクリエイティブな経験となっているということが明らかとなり、またその経験が他の事業にも繋がってゆく可能性が示唆された。レジデンスアーティストの自由で実験的な活動の背景には浜松市鴨江アートセンターの自由な創造環境<sup>50</sup>があると考えられ、施設のハードの側面もこの成果に貢献しているだろう。

#### 4-2-2. レジデンスアーティストに対するインタビュー調査

2018 年度後期レジデンスアーティスト 4 名と 2019 年度レジデンスアーティスト 4 名、計 8 名に対してインタビュー調査を実施した。対象となる 8 名の年齢層は 20 代から 60 代であり、居住地について市内在住者は 5 名、市外(県内)在住者は 1 名、市外(県外)在住者は 2 名<sup>51</sup>である。

彼らのアーティスト・イン・レジデンスの応募の目的は、制作・発表場所の確保が中心的な回答であった。県外に在住しながら応募した 2 名は「知らない場所で制作してみたかった」「地元ではない場所で発表する機会を得たかった」と述べており、自身の制作環境を変えることやステップアップが応募目的となっていたようである。彼らのほとんどは過去にアーティスト・イン・レジデンスの経験がなく、浜松市鴨江アートセンターで初めてレジデンスを経験した。同施設での滞在制作を終えた後のアーティストは、滞在制作で生まれた作品を国内の他の場所で展示したり、作品を発展させるために浜松市の助成金<sup>52</sup>を獲得して活動を継続したりといった動きが見られる。このように同施設における滞在制作が参加アーティストのその後の活動に繋がっている様子が分かることから、事業の実施がアーティストの成長の面にも貢献できているといえるだろう。

これまで同施設におけるアーティスト・イン・レジデンスは体系的にアーカイブを残してこなかったが、2018 年度後期のレジデンスアーティストの提案がきっかけとなり本のかたちでアーカイブ作成を行うこととなった。このアーカイブは 2018 年度の前期・後期 8 名のレジデンスアーティストからの寄稿を元に編纂され、記録冊子として発行された<sup>53</sup>。

#### 分析軸：①インプットへの示唆

半構造化インタビューの中で、レジデンスアーティストの視点からインプットの改善点が発見された。「滞在してみた結果、アートセンターに外国人がよく訪れることを知って、

<sup>50</sup> 館内は飲食が可能であり、現状復帰を条件に壁に描くことも許容される。

<sup>51</sup> 県外在住者 2 名のうち 1 名は隣県のため自宅から通い、1 名は浜松市内に住まいを得て期間中移住。

<sup>52</sup> 2018 年度後期レジデンスアーティストの山本氏はレジデンス終了後、平成 31 年度浜松市創造都市推進事業補助金を獲得し作品のさらなる発展を試みている。

<sup>53</sup> 同施設における本の閲覧コーナーで公開されており、希望者には 1 人 1 冊配布している。



外国人にアプローチして活動してみたら良かったと気づいた」と話すアーティストがおり、多様な人を受け入れている同施設の特徴や情報を提供することでレジデンスアーティストの活動の幅が広がる可能性が読み取れる。情報提供を行うことやアートセンターの活動等を体系的にまとめた資料の作成などインプットの企画段階で新たに取り組んでみることへの示唆が得られた。

### 分析軸：②交流

ここでは、滞在中の交流の状況についてレジデンスアーティストの立場から見た印象やエピソードについて調査した結果を分析する。ロジックモデル(図 3-2)における「アウトプット(人とかかわる・その土地を知る)」の項目に該当し、滞在期間中全体を対象に交流の状況を聞き取りした。指標と調査項目(表 3-1-③)のⅡ-1 からⅡ-6 が交流に関する項目である。Ⅱ-1「誰と交流したか」という質問に対して「同期のレジデンスアーティスト」という回答が最も多い結果となった。作品制作への向き合い方など、同時期に滞在制作を行うアーティストから刺激を得る参加者もいた。また、「過去のレジデンスアーティストと知り合った」という回答もあり、アーティスト・イン・レジデンスの参加者同士でネットワークが形成されている様子が読み取れる。また、インタビューの中では、楽器練習など貸室利用で訪れる人がレジデンスアーティストの部屋を覗きに來たり成果発表の展示を見て行ったりすることや、近隣の障害者福祉施設<sup>54</sup>の利用者が散歩コースの一部として同施設を訪れた際にレジデンスアーティストと偶然出会ったことなど、多様な人が訪れる環境について言及するレジデンスアーティストもいた。レジデンスアーティストの中には訪れる人に対して自ら積極的なアプローチをしてゆくアーティストもおり、自身のレジデンス部屋の前で古本市を開催するという取り組みを行った。この実験的な取り組みから交流が生まれることがあったと述べており、手応えがあったようである。

Ⅱ-2「交流のきっかけは何であったか」という質問に対して「職員が繋いでくれたことがあった」と回答があった一方で、Ⅱ-3「交流の度合いはどの程度か」ということを聞き取りしたところ、地元のアーティストやクリエイターとの交流は互いに名刺交換等知り合う程度にとどまり、交流の度合いはそれほど深くないことが分かった。4-2-1. で担当職員へのインタビュー結果から分析した人材のつなぎ手の機能は、確かに果たされているものの、一部を除いて<sup>55</sup>その後の深い交流にはまだあまり至ってない可能性が読み取れる。

<sup>54</sup> 特定非営利活動法人クリエイティブサポートレッツの拠点であるたけし文化センター連尺町(図書館カフェ・ゲストハウス・シェアハウス・音楽スタジオ・障害福祉施設を併設した施設)は浜松市鴨江アートセンターから徒歩圏内に位置している。

<sup>55</sup> 今回調査した対象の中で、市内デザイナーと今後協働してゆく可能性が示唆されるレジデンスアーティストが1名いた。

### 分析軸：③創造都市政策としてのアーティスト・イン・レジデンス

分析軸②で、レジデンスアーティストと地元クリエイティブ人材との交流の実態が明らかになった。創造都市政策としてアーティスト・イン・レジデンスを捉える時、その有効性は外部人材の取り入れやレジデンスアーティストと地元クリエイティブ人材との創造的な刺激の交換にあると想定されるが、今回のレジデンスアーティストに対するインタビュー調査では浜松市鴨江アートセンターにおけるアーティスト・イン・レジデンスにおいてはその点がまだ成果として現れていないということが明らかになった。この点について、4-2-3.で地元クリエイティブ人材の視点からも検証していく。ただし、レジデンスアーティストからは「近代建築であるアートセンターの建物から刺激を受けた<sup>56)</sup>」ことや「アーティストだけでなく貸室利用の様々な人がいる環境がむしろ刺激的だった<sup>57)</sup>」というエピソードが話されたことから、浜松の歴史的資源であるアートセンターの建築やその存在がレジデンスアーティストに刺激を与えていることが明らかとなった。したがって、浜松市鴨江アートセンターにおいて時間的・空間的多様性が担保されていることが示唆される。このことから「場所」のポテンシャルを評価することが可能である。第1節で確認された同施設におけるアーティスト・イン・レジデンス応募者の応募理由に「場所の特性に惹かれて」という理由が多いことも評価の根拠となるだろう。創造都市として歴史的建造物を活用したアーティスト・イン・レジデンス事業を展開することの意義を見出すことができる結果となった。また、地元のアーティストやクリエイターなどとの密な交流はそれほど実現していないものの、同施設における職員はクリエイティブ人材の一部と捉えることができる文化芸術事業運営の専門家であり、そのスキルの向上にアーティスト・イン・レジデンス実施の効果が現れていると推測することができる。なぜなら、調査項目Ⅲ-2「制作のスケジュールは順調であったか」という質問に対して「成果発表の展示コンセプトで悩み、試行錯誤していたところに職員からアドバイスを心得て納得するかたちのアウトプットができた」とエピソードを聞き取ることができたためである。担当職員に対するインタビューでは職員自身のスキル習得について「あまり自覚はない」と回答していたが、レジデンスアーティスト側の視点から担当職員が無意識的に獲得していたスキルの発現を示唆する回答が得られた。

検証の手法的な面では、今回このような結果が得られたことから、多角的な視点を取り入れたインタビュー調査が効果の獲得の「意識」「無意識」を測ったり一方の回答を裏付ける根拠となったりすることが明らかとなり、事業の成果や効果を測る上で有効な手段である可能性が推測される。

<sup>56)</sup> 建物内の随所に当時の面影が残されている。

<sup>57)</sup> 浜松市鴨江アートセンターにおける貸室事業では、合唱、吹奏楽、演劇等の練習・発表で利用されることが多く、利用者の年齢層も子供から高齢者まで幅広い。ロビーには市民が自由に集っており、飲食をしたり勉強や読書に没頭したりといった様子が観察される。最近は市内在住外国人の貸室利用も増加傾向にある。

#### 4-2-3. 地元クリエイティブ人材に対するインタビュー調査

ここでは、浜松市内在住アーティスト4名とものづくりを行っている地元クリエイティブ人材(以下、ものづくり人材)5名<sup>58</sup>に対してインタビュー調査を実施した(表 3-1-④)。対象は全て市内における今後のクリエイティブな活動の中心となる20代から30代に設定した。

アーティストを対象としたインタビューでは、浜松市鴨江アートセンターやそこでのアーティスト・イン・レジデンス事業について最初期から知っているという回答が多かった。そのため、今回インタビュー対象としたレジデンスアーティスト8名(2018年度後期4名と2019年度前期4名)よりも前の参加者についてのエピソードや毎年の事業に対する印象などを聞き取ることができた。また、同施設のロビーを活用して仕事のミーティングを行うなど、アーティストの活動の場としてアートセンターが実際に活用されていることが分かった。今回対象とした4名のアーティスト中3名が浜松市の助成金<sup>59</sup>を獲得した経験があり、公的資金を得ながら自身の活動を展開しているようである。彼らは浜松を拠点に作品制作をしており、発表の場は浜松や東京が中心となっている。クリエイティブ人材とのネットワークの状況は浜松市鴨江アートセンターでの繋がりや芸術の高等教育機関での繋がり、自身の創作ジャンルに関する全国の繋がりなど全体的にアートに関連するネットワークの状況が見られた。浜松市は製造業における就業者数が特徴的であるが、そのような業界とアーティストの繋がりほとんど見られない状況である。

一方、ものづくり人材に対するインタビュー調査ではアーティストとは違った状況が見えてきた。まず、同施設はある程度認知されていることが分かり、インタビュー対象の中には事業に直接的に関わった経験のあるものづくり人材もいた。しかし、施設を知っているものの「訪れたことはない」という回答や「どのようなことをやっている場所なのか分からない」といった回答もあった。また、アーティスト・イン・レジデンスについても「知り合いが参加していて名称を聞いたことはある」という回答が大半を占めており、市内在住アーティストと比較して同施設に対するコミットの程度は低いようである。また、自身の活動と浜松市との関わりという点についても、助成金獲得の経験のあるものづくり人材は今回のインタビュー対象のうち1名のみであった。

ものづくり人材におけるネットワークの状況においても、アーティストとの繋がりが見られるのはごく一部であり、前述したアーティストに対するインタビュー調査結果と照らし合わせてみると両者はほとんど交わっていないということが分かる。異業種間でネットワークが深く繋がることは難しいが、ゆるやかな繋がりも確認できないという結果となった。

<sup>58</sup> 本稿 p. 20 に記述した地元クリエイティブ人材について、浜松市はメーカーの集積が特徴的なことからテクノロジーを活かしたものづくりを行なっている人材が多く集積しているため、今回のインタビュー対象とした。

<sup>59</sup> 浜松市による「みんなのはままつ創造プロジェクト」は創造都市の実現に向け、市民活動団体や企業等が企画・実施する創造的な取り組みを応援する事業で、事業経費を補助する取り組みのことである。(2018年度まで実施。2019年度から浜松市創造都市推進事業補助金に移行した。)

た。浜松市における地域のクリエイティブ人材同士のネットワーク状況は、フロリダ(Florida(2002))が指摘したクリエイティビティの向上に関わる「弱い絆」<sup>60</sup>が形成されていないという状況を示していると言えるだろう。

また、両者とも浜松市の創造都市政策に対する認識は「聞いたことがある」程度が大半を占めた。中には創造都市について学んでみた経験のある者もいたが、多くはその考え方や浜松市の取り組みを知らないという状況である。

#### 分析軸：①インプットへの示唆

ものづくり人材に対する半構造化インタビューの中で、「情報へのアクセス」が課題として述べられることがあった。普段の自身の活動場所ではアーティスト・イン・レジデンスの募集チラシを見たことが無いという回答があった。本研究では、これまで応募資料の分析からチラシやHP、SNSによる告知の成果が上がってきていることを明らかにしてきたが、チラシの配布先の検討に改善の可能性が発見された。市内における同施設の活動の十分な周知のためにも、市内のものづくり人材の集まる場所やこれまで配布先としてこなかった施設について再検討してみる必要性が示唆される。

調査項目Ⅲ-3「これまでにレジデンス事業(制作もしくは発表)を見にきたことはあるか」という質問に対して、市内アーティストはアーティスト・イン・レジデンスの発表を見る時のきっかけとして何らかの用事でアートセンターを訪れた際にアーティスト・イン・レジデンスの成果発表が実施されていれば見るという回答が多かった。一方でものづくり人材に対する同様の質問では、見に行ったことが無いという回答もあるものの、見にいった経験があると回答した対象者は「気になる人がレジデンスにいたから」「興味のある情報を得て見に行った」などきっかけがあることが分かった。アーティスト・イン・レジデンス事業に対するクリエイティブ人材別のアクセスのきっかけが明らかになったことで成果発表時期の設定やレジデンスアーティストに関する情報発信の仕方に検討の可能性が見出される。

#### 分析軸：②交流

調査項目Ⅳ-1「レジデンスアーティストとのネットワークはできたか」という質問に対して、市内アーティストからは「これまでのレジデンスをきっかけに新たに知った市内のアーティストやクリエイターがいる」「レジデンスアーティストに依頼されて作品の額を制作した」などの回答を得た。これまで同施設がアーティスト・イン・レジデンス事業を続けてきた中で、市内在住のアーティスト同士がアーティスト・イン・レジデンスをきっかけに知り合うことやアーティスト同士で専門領域を活かした協力がなされることがあ

---

<sup>60</sup> 本稿 p.6 で「弱い絆」について説明しているため、そちらを参照されたい。

った事実が確認された。「担当職員」と「レジデンスアーティスト」に対する今回のインタビュー調査では交流の深度は名刺交換程度に留まっていることが分かったが、同施設におけるアーティスト・イン・レジデンスを長く知っている地元アーティスト側からこのようなエピソードを得ることで、交流の状況について多角的に検証することができた。つまり、レジデンスアーティストと地元アーティストの関係においては、その繋がりも多くが名刺交換程度の結びつきであるが、過去には専門領域を活かした協力等が発生しているということである。中長期的に同施設におけるアーティスト・イン・レジデンスを見てきた地元アーティストの視点から俯瞰すると、レジデンスアーティストと地元アーティストとの間にゆるやかな繋がりが形成されている可能性が示唆される。

しかし、ものづくり人材からの回答にはネットワーク構築に至ったエピソードはなく、あまり交流はなされていないことが分かった。市内のアーティストとものづくり人材間の「弱い絆」が形成されるに至っていない点について先に指摘した通りであるが、レジデンスアーティストと地元ものづくり人材間のゆるやかな繋がりもあまり見られない。同施設におけるアーティスト・イン・レジデンス事業は5年以上の継続がなされているが、今回の調査でレジデンスアーティストと地元アーティストの関係性について指標に対する値が得られた一方で、レジデンスアーティストと地元ものづくり人材の交流の深度についてデータが得られない結果となった。

#### 分析軸：③創造都市政策としてのアーティスト・イン・レジデンス

上記の分析軸②からアーティスト・イン・レジデンスの実施によるレジデンスアーティストと地元クリエイティブ人材との交流の深度が明らかになったが、次のステップとして交流を経て実際にお互いのクリエイティビティが刺激されるに至っているかどうかについて分析していく。まず、地元アーティストに対して調査項目V-1「レジデンスアーティストの制作プロセス、発表、交流を通じてどのような刺激を得たか」という聞き取りを行ったところ、レジデンスアーティストの活動から自分自身の創作に刺激を受けた経験は回答にほとんど現れなかった。地元アーティストはレジデンスアーティストと一部深い交流が見られた一方で、クリエイティビティの高まりにはまだ至っていないようである。同様にものづくり人材からもクリエイティビティの刺激はなされていないという回答が得られた。分析軸②に関連し、そもそも交流が発生していなかったりこれまでアーティスト・イン・レジデンスを見にきたことが無かったりという要因からレジデンスアーティストから刺激をほとんど受けていないという現状が明らかである。これらのことから、創造都市政策としてのアーティスト・イン・レジデンスを評価するためのロジックモデル(図 3-2)における「アウトカム」に設定した「地元クリエイティブ人材のクリエイティビティを刺激」という項目は達成されていないことが分かる。

## 小括

これまで見てきた「担当職員」「レジデンスアーティスト」「地元クリエイティブ人材」に対するインタビュー調査の分析結果を整理していく。

### 分析軸：①インプットへの示唆

インタビュー調査を通して事業の PDCA サイクルを回すためのインプットへの示唆という点で明らかになったことは以下の2つである。

#### ・広報業務における工夫

浜松市鴨江アートセンターにおけるアーティスト・イン・レジデンスは市内・県内だけでなく全国の文化施設に向けて担当職員の工夫によって広報活動が行われており、その成果は年々上がってきている。このことは、より多様な人材を取り入れるという意味で創造都市の実現に貢献するものである。しかし、地元のものづくり人材に対するインタビュー調査の中で「チラシを見たことがない」という回答があったということは、すなわち市内のクリエイティブな人材に向けて同施設の取り組みがまだ十分に周知されていないということである。全国に向けた広報の工夫はそのままに、市内の広報先についての検討可能性が示唆される。

また、地元アーティストと地元ものづくり人材の間にはアーティスト・イン・レジデンスの成果発表などに訪れる際のきっかけに違いがあることが明らかとなった。何らかの用事で同施設に訪れた際に成果発表が行われていれば見るという傾向を示した地元アーティストに対して、地元ものづくり人材は発信された情報をきっかけに訪れる傾向がある。地元クリエイティブ人材別にアーティスト・イン・レジデンスに対するアクセスのきっかけを分析し、効果的に当該事業を発信する必要性を指摘することができる。

#### ・場所のポテンシャルをさらに活かす

これまで見てきたインタビュー調査の結果から、レジデンスアーティストにとって同施設の場所が刺激的な空間になっており、場所のポテンシャルが明らかになった。時間的・空間的多様性が実現している同施設に滞在してみて「外国人にアプローチして活動してみたら良かった」と回答するレジデンスアーティストもいたことから、アーティストの活動の幅を広げ、また場所の特徴をさらに活かすために、同施設についてレジデンスアーティストに説明したり情報提供したりといった企画への取り組みに可能性を見出すことができる。

### 分析軸：②交流

ここでは「担当職員を含めたスタッフとレジデンスアーティストの関係」と「地元クリエイティブ人材とレジデンスアーティストの関係」の2点に整理する。

#### ・担当職員を含めたスタッフとレジデンスアーティストの関係

同施設におけるアーティスト・イン・レジデンスでは、レジデンス部屋の鍵開けの習慣によりスタッフ全員が日常業務の中でレジデンスアーティストと関わる機会があり、創造都市政策推進拠点で働く人材として多様性や寛容性にポジティブな影響を受けていると考えられる。担当職員はレジデンスアーティストを市民や地元クリエイティブ人材と結びつける仲介機能を果たしており、人材交流のハブとなれている様子が分かったが、一方でその後の交流の深度は様々であり今後も継続調査の必要がある。

#### ・地元クリエイティブ人材とレジデンスアーティストの関係

今回の調査では地元クリエイティブ人材を大きくアーティストとものづくり人材に分けてインタビューを実施した。同施設におけるアーティスト・イン・レジデンスを初期の頃から知る地元アーティストの視点から得られたエピソードにより、レジデンスアーティストと地元アーティストの間にゆるやかな繋がりが形成されていることが示唆された。担当職員とレジデンスアーティストだけの調査では測れなかった結果であり、「短期的な視点(或いは当事者の視点)」と「中長期的な視点(或いは第三者の視点)」から多角的に検証を行うことの必要性が示される。しかし、一方でレジデンスアーティストと地元ものづくり人材の交流はあまり実現しておらず、ネットワークの形成には至っていないことが分かった。

### 分析軸：③創造都市政策としてのアーティスト・イン・レジデンス

本研究で開発する評価システムは、アーティスト・イン・レジデンスの実施による都市への多様な人材の取り入れと交流を通じた地元クリエイティブ人材の創造性への刺激が創造都市の実現に貢献する効果として捉えている。創造都市政策としてのアーティスト・イン・レジデンスについて、今回の調査で明らかになった効果を大きく2点にまとめる。

#### ・文化芸術事業における専門人材の育成

今回の調査を通してアーティスト・イン・レジデンス事業を運営する現場の担当職員のスキル向上に効果の片鱗が観察された。担当職員はレジデンスアーティストの自由な創作に伴走し、そのマネジメントを行う文化芸術事業の専門職である。アーティスト・イン・

レジデンス運営の経験によって施設の活用の仕方や企画の発想<sup>61</sup>などに刺激を受けている可能性が推察される。

・歴史的建造物の活用

今回の調査ではレジデンスアーティストと地本クリエイティブ人材の創造的な刺激の交換は見られなかった。その一方でレジデンスアーティストからは事業実施場所の特性から刺激を得ていることについて言及があり、浜松市鴨江アートセンターの建物が持つポテンシャルの高さが窺われる。創造都市において歴史的資源を活かすことや貸室事業による多様な人の利用促進は、アーティスト・イン・レジデンスの実施場所として良い影響を及ぼしている可能性について示唆を得た。このことに関連し、貸室利用などで同施設を訪れる市民に対してアーティスト・イン・レジデンスはどのような効果を生んでいるのか今後調査を行う必要があるだろう。

---

<sup>61</sup> 過去のレジデンスアーティストとの繋がりを活かして浜松市鴨江アートセンターで再び発表の機会を支援する企画が2020年1月に2つ予定されている(2019年12月現在)。



## 第5章 評価システムの妥当性の検証結果

この章では第4章で整理した評価の試行結果をもとに、本研究で開発した評価システムが政策目標に対して有効に働くシステムとなっているのか、現場のPDCAに貢献できるものとなっているか、そして実際に運用していくためにシステムにどのような改善を加えてゆけばよいかという点を検討する。設置者である浜松市と現場の運営者に対してロジックモデルや試行結果を示してそれぞれの立場から評価の有効性や運用可能性についてインタビュー調査を行った結果を整理、分析してゆく。

### 第1節 試行結果をもとにしたインタビュー調査—対象：事業運営者

現場の事業運営者である鴨江アートセンター館長とAIR事業担当者に対して評価システムの実務的な運用可能性やシステムの改善点についてインタビュー調査を実施した。ここでは毎年度の評価結果は施設や事業の説明に使用したり事業運営のPDCAに活用したりすることに期待できることが確認された。実務的な運用可能性については大きく以下3つの提案がなされた。

#### ①可能な限りシンプルな評価方法に落とし込むこと

複雑な評価システムだと調査に時間がかかったり、現場で内容を共有しにくかったり運用面に課題がある。シンプルで分かりやすく、内容を共有しやすいシステムが望ましい。また、今回は筆者が参与観察で現場に入り込んでいたことや職員が調査に協力したことで評価システムの目的や仕組みについて共通認識があるが、現場の人材が異動することも踏まえて評価の運用イメージやマニュアルがあるとよい。

#### ②定量データの調査は非常勤職員に委任可能であること

応募資料の調査について、同施設の非常勤職員への委任可能性が示された。ただし、調査を行う非常勤職員も評価の意義や目的を理解していないと単なる作業になってしまうという注意点も挙げられた。レジデンスアーティストなどに対する聞き取り調査は、これまでもやって来た振り返りの機会を利用すれば職員による実施が可能である。その際、質問紙ベースでインタビューができると職員の負担が少ないと考えられる。

#### ③評価結果を可視化して職員間で共有し第三者にも示すこと

浜松市鴨江アートセンターにおける既存の外部評価委員会の中でアーティスト・イン・レジデンスの評価結果を提示しコメントを求めることは可能であるかという筆者の提案に対して、運営者から実際の評価委員会の中で占めるアーティスト・イン・レジデンス事業に関するトピックの時間は非常に限られているため、視覚的に分かりやすい結果として提示する必要性が提案された。また、点数やレーダーチャートなどの方法で視覚化された評

評価結果は職員間における共有もスムーズにすると考えられる。評価結果の視覚化が第三者への説明に有効に働くことから、結果の視覚化プロセスをシステムに加える必要が確認された。

## 第2節 試行結果をもとにしたインタビュー調査—対象：浜松市

次に、浜松市鴨江アートセンターの所管課である浜松市市民部創造都市・文化振興課に対して実施したインタビュー調査の結果を示す。

本研究で開発した評価システムは創造都市の一般的な考え方に基づいて理論を組み立てているため、ロジックモデルが実際に自治体の掲げる創造都市の政策目標や目指す方向と整合性が取れているか確認した。これに対して市から「政策目標と重なる部分もある」と回答を得た。このことから、本研究において開発した評価システムが行政の目指す方向性に寄与する可能性が推測される。ただし、本評価システムが他の創造都市の政策目標にも対応可能であるかについて調査の必要がある。

また、今後評価のための調査を継続していくと想定して、毎年度ごとのアウトプット指標やアウトカム指標の推移は指定管理の仕様や予算を決定する際に活用できるかという問いに対して「指定管理者の仕様を検討する際、考え方などが参考となる」と回答を得た。毎年度の調査の継続は事業や施設のあり方に将来的に影響を与える可能性があることが示唆される。

しかし、実際に現場でどのように運用していくかという課題や、指定管理者の交代による評価システムの有効性への影響など運用面に生じる課題が示された。

### 小括

この章では本研究で開発した評価システムについてその実務的な運用方法や政策への有効性などを調査した。これらの調査から、評価システムを事業評価として現場で運用してゆくことの可能性が見出された。インタビューで明らかになった運用のための3つのポイント ①可能な限りシンプルな評価方法に落とし込むこと、②定量データの調査は非常勤職員に委任可能であること、③評価結果を可視化して職員間で共有し第三者にも示すことを踏まえて評価システムを再検討した。

図 5-1 はシステムの検証プロセスを踏まえて本研究で開発した評価システムの運用イメージ図である。この評価システムは現場で毎年度ごとの運用を基本としている。評価のための調査を行う人材はアーティスト・イン・レジデンス事業担当職員と非常勤職員を想定している。年度ごとにアーティスト・イン・レジデンスの応募資料の調査を非常勤職員に委任し、レジデンスアーティストの滞在が終わるごとに質問紙をベースとした聞き取り

調査を担当職員が実施してデータを収集する<sup>62</sup>。前者は量的データを、後者は質的データを扱う狙いがある。これらのデータを指標に対する値として点数化やレーダーチャート化し、年度ごと事業のPDCAサイクルに貢献することが一番の目的である。可視化された評価結果は現場の職員間で共有されることが重要であり、さらに第三者<sup>63</sup>とも評価結果を共有することが理想である。また、毎年継続して評価を行なっていくことで経年の推移を観察してゆくことも大切なプロセスである。浜松市に対するインタビュー調査の結果からアウトプット指標やアウトカム指標の推移が将来的に施設や事業のあり方に影響を与える可能性が示唆されており、本研究で開発した評価システムが長期的な観点において政策に対して有効性を発揮する見込みが推測される。

---

<sup>62</sup> ここで注意したい点は、評価の意義や目的を理解しないまま調査を行なっては単なる作業に終始してしまう可能性があり、担当職員から非常勤職員に至るまで評価の必要性を共有する必要があるという点である。

<sup>63</sup> 事業を運営する現場の外に評価結果を示すことが望ましい。外部評価委員やボードメンバーなどが想定される。

## 終章 結論と考察

ここまで、創造都市における文化芸術の取り組みの中でも特にアーティスト・イン・レジデンス事業に焦点をあててその評価のあり方を明らかにすることを目的に調査分析と評価システムの開発を行ってきた。創造都市推進政策としてのアーティスト・イン・レジデンスの評価のあり方について明らかになった点について以下のようにまとめられる。

### 創造都市政策としてのアーティスト・イン・レジデンスの評価のあり方

#### ①現場のPDCAサイクルに最も貢献する評価システム

本研究において開発した評価システムは、現場での運用を基本とする事業評価であり、現場のPDCAサイクルに最も貢献するという目的を持ったものである。また、中長期的には政策にも影響を与え得るものであると位置付けられる。まずは現場で年度ごと評価システムを運用し、PDCAサイクルに活用するインプットとアウトプットについて指標に対するデータを収集する。そしてアウトカムなどの経年の変化を行政に提示するという自主的かつボトムアップ式の評価の活用法である。

基本的には年度ごと担当職員による自己評価シートと滞在終了時のレジデンスアーティストに対する聞き取り調査を実施してデータを収集する。また、年度ごとに応募資料の定量的調査も併せて行う。なお、5年など中長期的な節目において地元クリエイティブ人材や市民に対して調査を行う必要があり、この調査は行政が行うべきものとして提言したい。想定される現場での運用方法は以下の通りである<sup>64</sup>。

- |            |  |
|------------|--|
| ・ 評価の目的    | 現場における事業評価   |
| ・ 評価の位置付け  | 基本的に現場の事業マネジメントに活用し、評価の継続によって創造都市政策への効果を測り、中長期的には政策に影響を与える   |
| ・ 評価のための人材 | 担当職員(補助的に非常勤職員など)  |
| ・ 調査       | 応募資料の分析(定量的調査/年度ごと)<br>担当職員による自己評価シート(定性的調査/年度ごと)<br>レジデンスアーティストに対する聞き取り調査<br>(質問紙ベース/定性的調査/滞在終了時) |
| ・ 評価(点数化)  | 調査結果を点数化しレーダーチャートに示す   |
| ・ 事業の改善    | 職員間における評価結果の共有が基本であり、第三者との共有も行えるのが理想。実現可能なところから事業の改善を行う。   |

<sup>64</sup> 評価システム運用イメージは図 5-1 に示している。

## ②多角的な検証システム

評価の試行を通して、同一の指標に対して多角的に検証することの有効性や重要性が明らかになった。多角的に検証を行うことにより一方のデータの裏付けや別角度からのデータを得ることができる。例えば、レジデンスアーティスト滞在中の交流の様子に関する指標についてレジデンスアーティストから主観的な印象やエピソードを聞き取る一方で、担当職員へのインタビュー調査では職員の視点から見た彼らの交流の状況や交流のきっかけ作りに対する職員の貢献度などを聞き取り、定期的に第三者からもデータを収集する仕組みである(図 6-1)。このような手法により、多角的な検証が可能となる。

## ③この評価システムによって明らかになること

今回の評価の試行では広報業務の成果や今後の改善点、クリエイティブ人材である担当職員のスキル向上、場所のポテンシャルなどが検証された。この評価システムにより事業のPDCAにつながるポイントや創造都市への効果などを測ることが可能になった。今後は、今回効果の発現が見られなかった項目など他の評価項目について指標に対する値の変化を見てゆく必要がある。

## ④今後の課題

本研究で開発した評価システムは浜松市における事例に特に焦点をあてたものである。そのため、今後の課題として他都市での応用可能性について検証していく必要がある。また、評価システムの運用における追跡調査や施設全体の評価システムの構築の必要性もあるだろう。本研究ではアーティスト・イン・レジデンスを自治体の文化芸術事業として捉えて評価軸を設定したが、アーティストの活動を評価する軸など他の評価軸もアーティスト・イン・レジデンスの評価に必要な要素である。本研究で開発した創造都市推進政策としてのアーティスト・イン・レジデンスの評価システムは、アーティスト・イン・レジデンスに関する数ある評価軸のうちの一つとして参考にされたい。

今回作成したロジックモデルや指標は今後の政策の転換や社会の変化において更新や改善が必要になる可能性がある。評価システムは時代の変化に対応し続けるべきものであり、本研究で開発した評価システムは絶対のものではないため柔軟に変化し続けていく必要がある。本研究がわが国における文化芸術事業に関する評価研究の蓄積の一部になれば幸いである。

## 謝辞

修士論文の調査と執筆にあたり、終始丁寧に指導してくださった主指導の片山泰輔教授をはじめ、大学院文化政策研究科の先生方に厚く御礼申し上げます。調査においては浜松市市民部創造都市・文化振興課の松島様と牧野様、浜松市鴨江アートセンター館長村松様と職員・非常勤職員の皆様、アーティスト・イン・レジデンス参加者の皆様、市内クリエイティブ人材の皆様にお忙しい中ご協力をいただきました。また、2019年12月21日(土)22日(日)に開催された第13回日本文化政策学会さいたま大会での研究発表におきまして研究者の皆様に的確なご指摘やアドバイスをいただきました。皆様のご協力とご指導に感謝いたします。

## 参考文献

- 一般社団法人文化政策経営人材研究所(2019)『国際文化芸術発信拠点形成事業 静岡市委託 フェスティバル評価システム構築業務 2018 報告書』
- 内村太一(2014)「〔事例報告〕文化庁補助事業「文化芸術の海外発信拠点形成事業」の見直しの過程について」『文化政策研究』第8号、pp. 153-169
- 片山泰輔ほか(2010)「浜松市における創造都市形成への取組」『静岡文化芸術大学研究紀要』VOL. 11、pp. 109-115
- 菅野幸子(2004)「Ⅱ. フランス 甦るナントー都市再生への挑戦」『文化による都市の再生～欧州の事例から 調査報告書』国際交流基金
- 菅野幸子(2009)「第9章 現代アートとグローバリゼーション—アーティスト・イン・レジデンスをめぐって—」佐々木雅幸・川崎賢一・河島伸子編著『グローバル化する文化政策』勁草書房、pp. 176-204
- 国際交流基金企画室(1995)アーティスト・イン・レジデンス研究会編『アーティスト・イン・レジデンス(AIR)研究会 報告書』
- 後藤和子(2003)「創造的都市論への理論的アプローチ—文化政策学、文化経済学、経済地理学の視点から、場と関係性の概念を中心として—」『文化経済学』第3巻第4号(15)、pp. 1-17
- 小林瑠音(2014)「英国における芸術の社会的インパクト評価に関する基礎的考察—政策的背景と評価手法—」『文化経済学』第11巻第1号(36)、pp. 8-17
- 佐々木雅幸(2012)『創造都市への挑戦 産業と文化の息づく街へ』岩波書店
- 札幌国際芸術祭 2014 事業評価検証会(2016)『札幌国際芸術祭 2014 事業評価検証会 報告書』
- 滋賀県立陶芸の森(2019)『平成 30 年度 アーティスト・イン・レジデンス研究会及びトークショー 報告書』
- 柴田葵「アーティスト・イン・レジデンスの前史としての彫刻シンポジウム」『環境芸術学会』第9号、2010、pp. 81-86
- 田中啓(2014)『自治体評価の戦略 有効に機能させるための16の原則』東洋経済新報社
- 浜松市(2009)『浜松市文化振興ビジョン』
- 浜松市(2013)『「創造都市・浜松」推進のための基本方針』
- 浜松市市民部創造都市・文化振興課(2017)『浜松市鴨江アートセンター並びに浜松市旧浜松銀行協会 指定管理者公募仕様書』
- ニッセイ基礎研究所(2012)『文化庁委託調査 文化政策の評価手法に関する調査研究報告書』
- ニッセイ基礎研究所(2013)『平成 24 年度文化庁委託事業 諸外国のアーティスト・イン・レジデンスについての調査研究事業報告書』
- 吉田隆之(2012)「都市型芸術祭「あいちトリエンナーレ」の政策評価—政策立案・決定過程の考察を踏まえて—」『文化経済学』第9巻第2号(33)、pp. 56-67

六本木アートナイト実行委員会(2017)『六本木アートナイト事業評価検討会 2016 報告書』

Florida,R.(2002) *The rise of the creative class: And how it's transforming work, leisure, community and everyday life*, Basic Books.(井口典夫訳(2008)『クリエイティブ資本論 新たな経済階級の台頭』ダイヤモンド社)

Jacobs,J.(1961) *The death and life of great American cities*, Random House.(山形浩生訳(2010)『アメリカ大都市の死と生』鹿島出版社)

Landry,C.(2000) *The creative city: A toolkit for urban innovators*, Earthscan Publication.(後藤和子監訳(2003)『創造的都市：都市再生のための道具箱』日本評論社)

## 関連法令

浜松市(2013)『浜松市条例第 33 号 浜松市鴨江アートセンター条例』

## インターネット資料

AIR\_J 日本全国のアーティスト・イン・レジデンス総合データベース ARTICLE 荻原康子(2001)「わが国のアーティスト・イン・レジデンス事業の概況」(2019 年 12 月 26 日最終閲覧)

<http://air-j.info/resource/article/now00/>

浜松市鴨江アートセンターホームページ(2019 年 12 月 25 日最終閲覧)

<http://www.kamoeartcenter.org/>

浜松市公式ホームページ(2019 年 12 月 25 日最終閲覧)

<https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/>

浜松市指定管理者制度導入施設事後評価結果一覧(2019 年 12 月 25 日最終閲覧)

<https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/asset/shiteikanri/hyoka.html>

文化庁 国際文化芸術発信拠点形成事業(2019 年 12 月 25 日最終閲覧)

<http://www.kokusaikyoten.bunka.go.jp/>

文化庁長官表彰（文化芸術創造都市部門）被表彰都市一覧(2019 年 12 月 26 日最終閲覧)

[https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka\\_gyosei/chiho/creative\\_city/chokan\\_hyosho.html](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/chiho/creative_city/chokan_hyosho.html)

マイクロレジデンスネットワーク(2019 年 12 月 26 日最終閲覧)

<https://microresidence.net/>



## 図表

### 第2章

(表 2-1) ユネスコ創造都市ネットワークに加盟している国内都市の製造業就業者数

	総数(産業分類) 【人】	E 製造業 【人】	15 歳以上就業者 総数 1000 人あた りの製造業就業 者数
札幌市	844,313	52,933	63
旭川市	152,385	12,049	79
山形市	121,849	15,383	126
鶴岡市	64,816	12,618	195
金沢市	226,800	29,338	129
浜松市	401,729	105,696	263
名古屋市	1,088,005	175,725	162
神戸市	659,182	89,447	136
篠山市	21,329	4,415	207

「平成 27 年国勢調査」より筆者作成

(表 2-2) ユネスコ創造都市ネットワーク国内加盟都市の製造業就業者数ランキング

順位	都市	15 歳以上就業者総 数 1000 人あたり の製造業就業者数
1	浜松市	263
2	篠山市	207
3	鶴岡市	195
4	名古屋市	162
5	神戸市	136
6	金沢市	129
7	山形市	126
8	旭川市	79
9	札幌市	63

「平成 27 年国勢調査」より筆者作成

(表 2-3) 政令指定都市別の芸術家の数 (人)

	21 著述家，記 者，編集者	22 美術家，デ ザイナー，写 真家，映像撮 影者	23 音楽家，舞 台芸術家	芸術家総数
札幌市	1,670	4,570	1,030	7,270
仙台市	720	2,330	510	3560
さいたま 市	1,500	3,750	900	6,150
千葉市	920	2,190	430	3540
横浜市	5,430	12,930	3,910	22,270
川崎市	2390	7,090	3,370	12,850
相模原市	470	2,090	300	2,860
新潟市	610	1,720	210	2540
静岡市	430	1,790	350	2,570
浜松市	280	1,710	80	2070
名古屋市	1,640	6,550	1,520	9,710
京都市	1,480	5,910	770	8,160
大阪市	2,020	9,600	2,050	13,670
堺市	300	1,790	230	2,320
神戸市	1,000	3,870	750	5,620
岡山市	530	1,600	380	2,510
広島市	940	2,540	790	4,270
北九州市	280	1,170	240	1,690
福岡市	1,420	5,170	1,190	7,780
熊本市	530	1,350	230	2,110

「平成 27 年国勢調査」より筆者作成

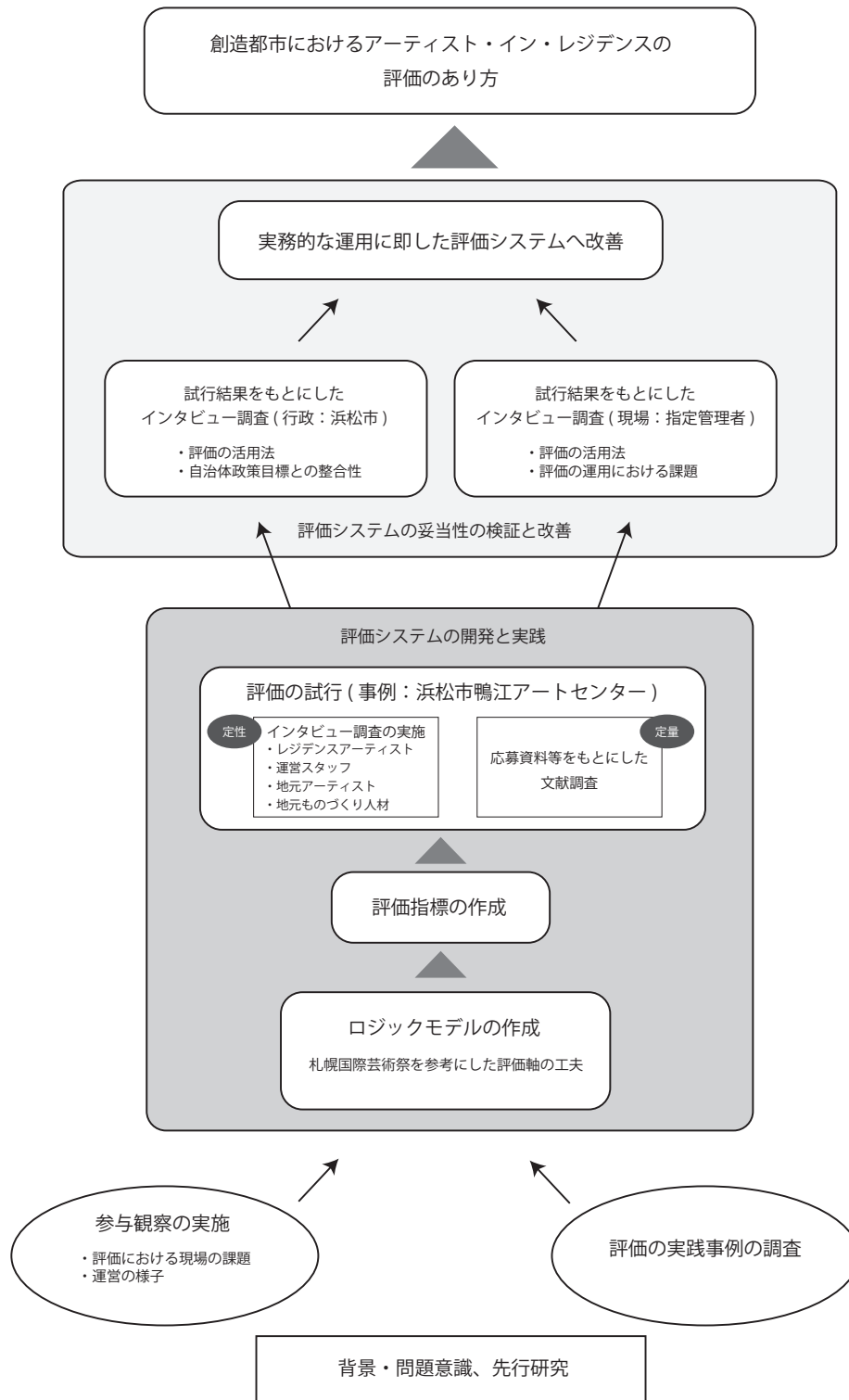
(表 2-4) 政令指定都市別の芸術家の数ランキング

順位	都市	15 歳以上就業者数 1 万人あたりの芸術家の数
1	川崎市	190
2	横浜市	133
3	京都市	123
4	大阪市	122
5	福岡市	116
6	さいたま市	105
7	名古屋市	89
8	相模原市	88
9	札幌市	86
10	神戸市	85
11	千葉市	82
12	広島市	75
13	仙台市	74
14	岡山市	74
15	静岡市	73
16	新潟市	65
17	堺市	63
18	熊本市	62
19	浜松市	52
20	北九州市	41

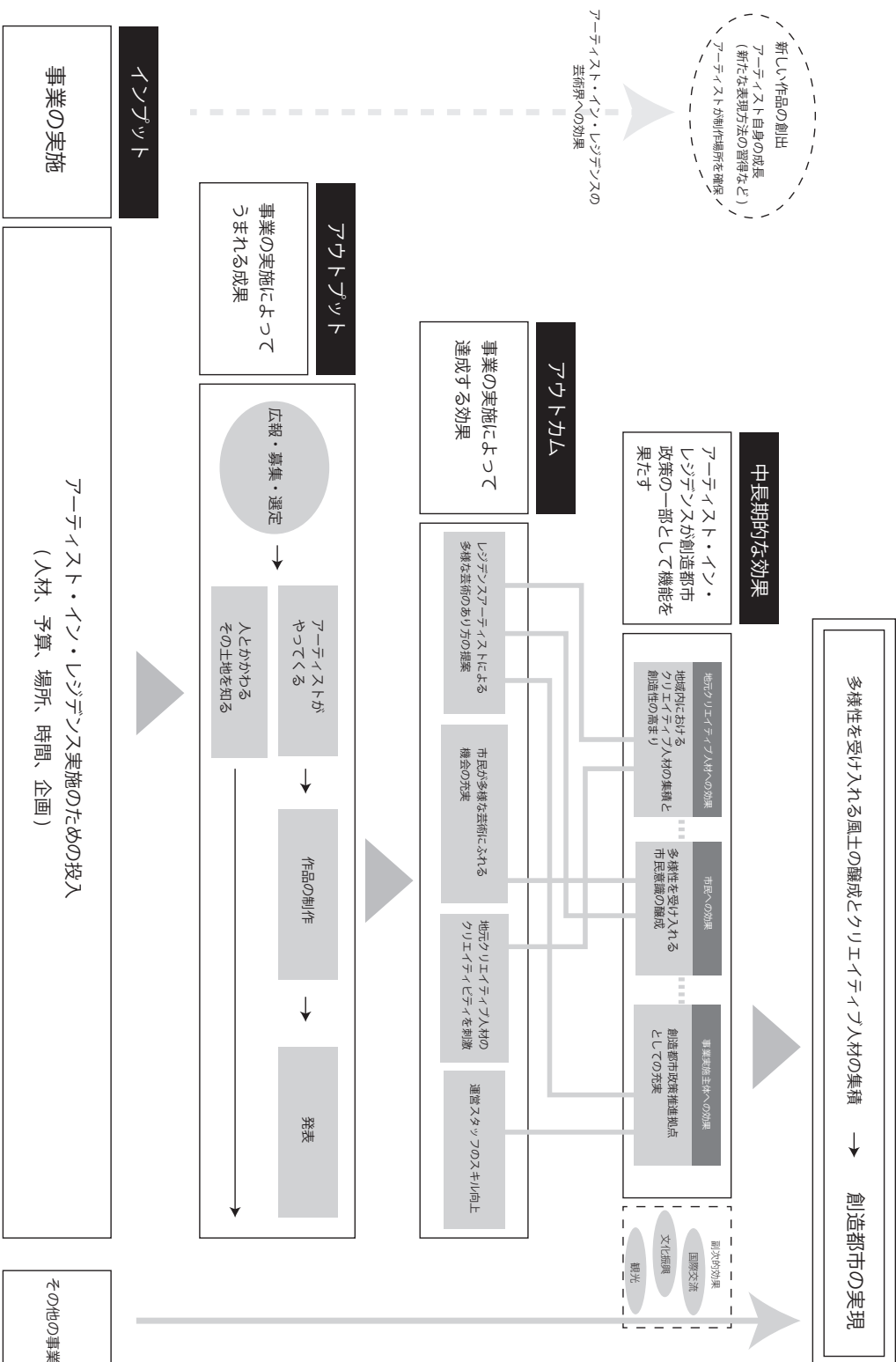
「平成 27 年国勢調査」より筆者作成

### 第3章

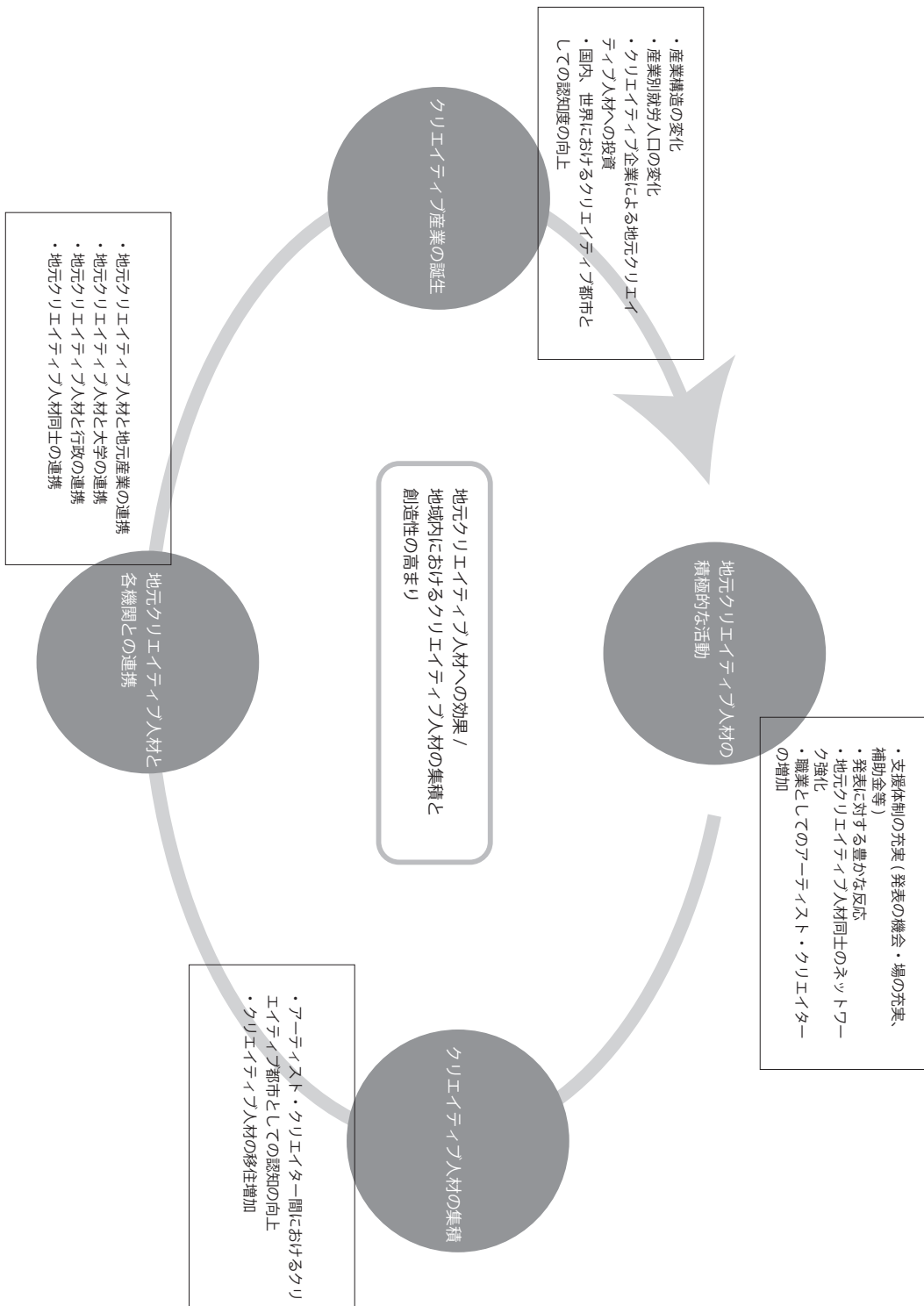
(図 3-1) 研究のフロー 筆者作成



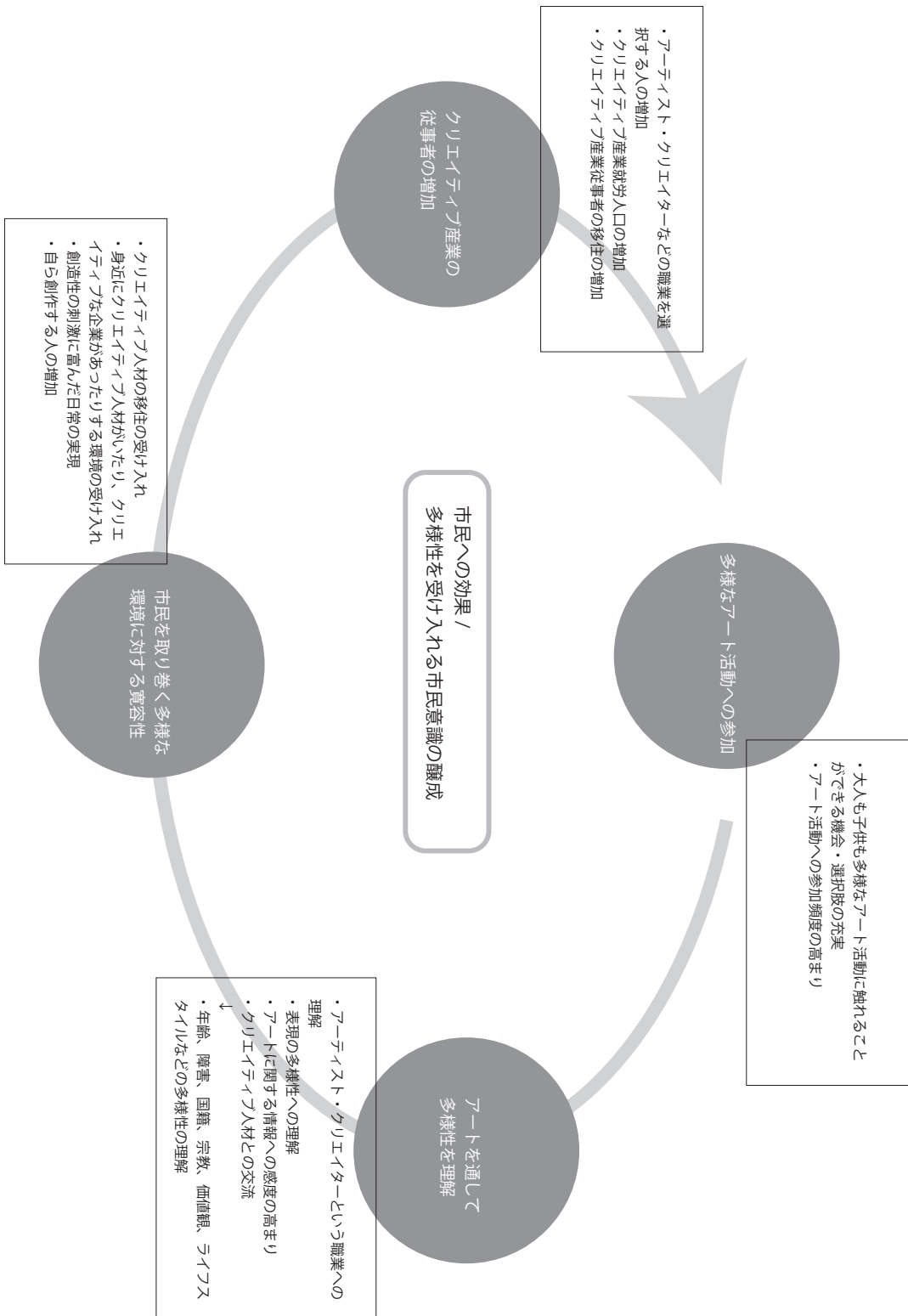
(図 3-2) 創造都市政策としてのアーティスト・イン・レジデンス評価のためのロジックモデル



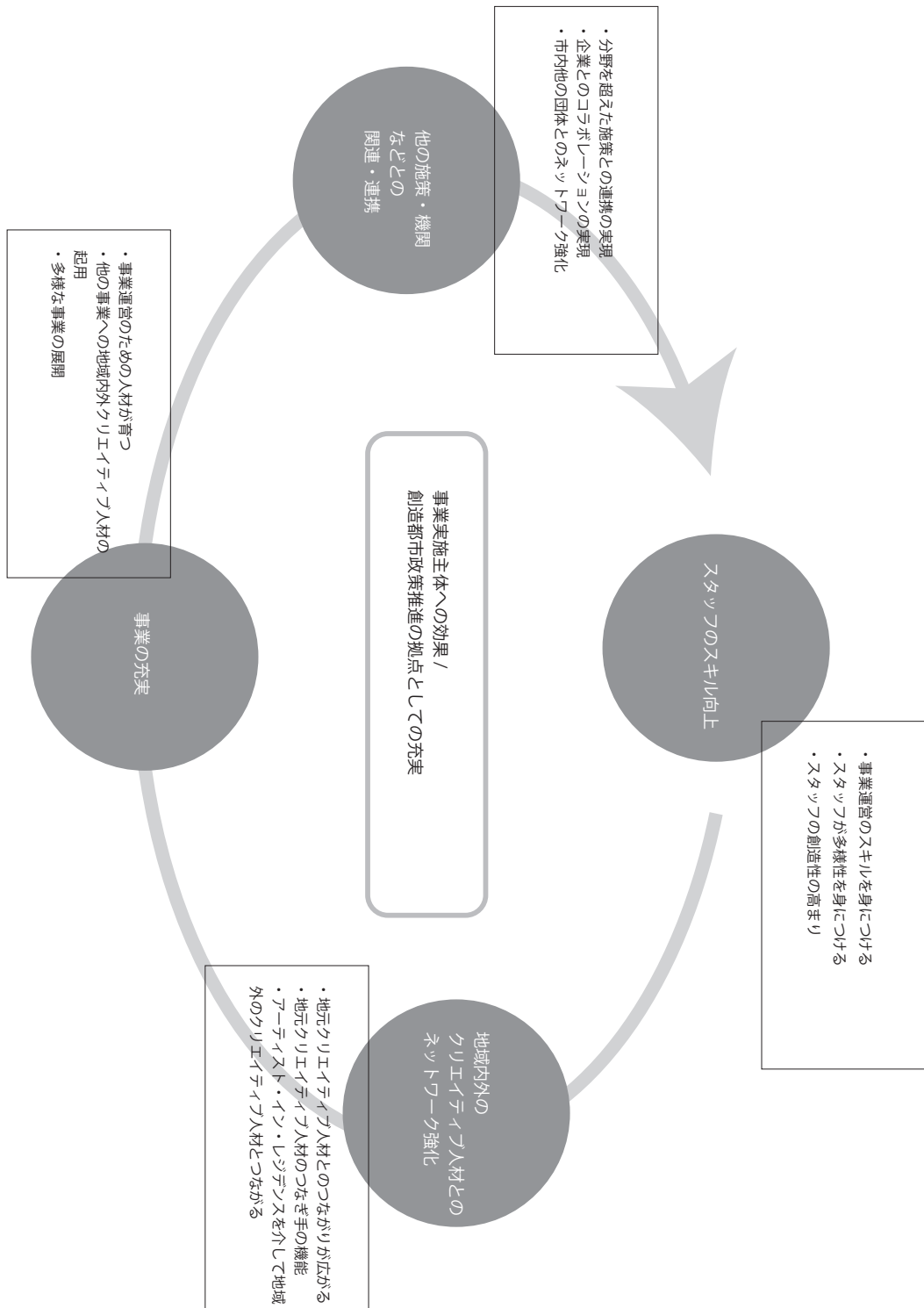
(図 3-3-①) ロジックモデルにおける中長期的な効果の循環モデル「地元クリエイティブ人材」 筆者作成



(図 3-3-②) ロジックモデルにおける中長期的な効果の循環モデル「市民」 筆者作成



(図 3-3-③) ロジックモデルにおける中長期的な効果の循環モデル 「事業実施主体」 筆者作成





(表 3-1-①) 評価のための指標と調査項目「応募資料等をもとにした文献調査」 筆者作成

指標			調査項目
アウト プット	アーティストが土地にやってくる	Ⅰ 応募資料等をもとにした調査	Ⅰ-1.応募数
			Ⅰ-2-1.応募者の年齢層
			Ⅰ-2-2.採択者の年齢層
			Ⅰ-3.応募者の居住地
			Ⅰ-4.応募者の国籍
			Ⅰ-6.募集を知ったきっかけ
			Ⅰ-7.応募理由

(表 3-1-②) 評価のための指標と調査項目「担当職員」 筆者作成

指標			調査項目
インプット	人材	Ⅰ .どのような人材が事業運営にあ たっているか	Ⅰ-1.担当職員の数は何人いるか
	予算	Ⅱ 事業運営にかかる予算と内訳	Ⅱ-1.予算総額はいくらか
			Ⅱ-2.制作における補助の内容につ いて
			Ⅱ-3.滞在における補助の内容につ いて
	場所	Ⅲ どのような場所が提供されている か	Ⅲ-1.滞在の場所
			Ⅲ-2.制作の場所
			Ⅲ-3.成果発表の場所
	時間	Ⅳ 期間はどのくらい設けられている か	Ⅳ-1.滞在制作の期間について
			Ⅳ-2.成果発表の期間について
	企画	Ⅴ 事業内容とその目的	Ⅴ-1.事業のビジョン
			Ⅴ-2.事業の目的
			Ⅴ-3.事業の内容

指標			調査項目
アウトプ ット	広報・募集・選定 の実施	Ⅵ 募集に対する応募数、適切な選定 がなされたか	Ⅵ-1.チラシの送付先を検討すると きの工夫

			VI-2.送付先のはどれくらいか
			VI-3.広報の媒体について
			VI-4.応募は実現したか
			VI-5.選定委員会は機能したか
	人とのかかわる・その土地を知る	VII担当職員から見たレジデンスアーティストの交流の状況	VII -1.レジデンスアーティストの交流の様子を観察していたか
			VII-2.交流のきっかけづくりに貢献できたか
	作品の制作	VIIIアーティストの制作スケジュールの管理について	VIII-1.制作スケジュールの状況についての把握はなされているか
			VIII-2.制作スケジュールについてのフォローの有無
			VIII-3.定期的なミーティングの有無
	発表	IX成果発表の実現	IX発表は達成されたか(またその形式は何か)

指標			調査項目
アウトカム	運営スタッフのスキル向上	X スタッフのスキル習得の状況	X-1.アーティスト・イン・レジデンスの運営を経験してどのようなスキルが身についたか
			X-2.職員間におけるノウハウ・スキルの共有の状況
			X-3.事業運営を通じた社会の多様性に対する理解度
		XI施設がクリエイティブ人材のネットワークハブとなれているか	XI-1.レジデンスアーティストとのネットワークの状況
			XI-2.レジデンスアーティストを介した地域外クリエイティブ人材とのネットワークの状況
			XI-3.他のレジデンス事業実施施設とのネットワークの状況
			XI-4. 事業運営を通して地元クリエイティブ人材とのネットワークが強化されたことはあるか

		XIIアーティスト・イン・レジデンス の運営経験は他の事業運営に影響を 及ぼしているか	XII-1 ネットワークを活かした事業 展開がなされているか
			XII-2.多様性を重視した事業が企画 されているか
			XII-3.スタッフのスキル・ノウハウ に基づくクリエイティブな事業が 企画されているか

(表 3-1-③) 評価のための指標と調査項目「レジデンスアーティスト」 筆者作成

指標			調査項目
アウト プット	アーティストが土地 にやってくる	I どのような人物がレジデ ンスに参加したか	I -1.年齢
			I -2.国籍・普段の制作拠点/普段の居住地
			I -3.レジデンス参加の動機
			I -4.モチベーション(来る前と来た後変化の有 無)
			I -5.これまでのレジデンスの経験
			I -6.分野・ジャンル・領域
	人とかかわる・その 土地を知る	II コミュニケーションの状況	II -1.誰と交流したか
			II -2.交流のきっかけは何であったか
			II -3.交流の度合いはどの程度か
			II -4.交流について期待していて実現したこと
			II -5.交流について期待していたが実現しな かったこと
			II -6.レジデンス期間中、地元クリエイティブ 人材からどのような刺激を受けたか
	作品の制作	III 作品制作のプロセスと状況	III -1.制作の公開の有無
			III -2.制作のスケジュールは順調であったか
	発表	IV 成果発表の実現	IV -1.成果発表の実現は達成されたか
			IV -2.思い描いていたイメージ・理想などは達 成できたか

(表 3-1-④) 評価のための指標と調査項目「地元クリエイティブ人材」 筆者作成

指標		調査項目
基本情報	Ⅰ 普段の地元クリエイティブ人材の活動の状況	Ⅰ-1.年齢と性別
		Ⅰ-2.仕事・活動・制作の内容
		Ⅰ-3.刺激を受ける機会・場所・人について
		Ⅰ-4.制作や発表を行う場所(拠点)はどこか
	Ⅱ 自治体との関わり	Ⅰ-5.他の地元クリエイティブ人材とのネットワークの状況について
		Ⅱ-1.どのような関わり方をしているか
		Ⅱ-2.創造都市政策を知っているか

指標			調査項目
アウトカム	地元クリエイティブ人材の創造性を刺激	Ⅲ 施設において実施されるアーティスト・イン・レジデンスの認知度とその印象	Ⅲ-1.当該施設を知っているか
			Ⅲ-2.アーティスト・イン・レジデンスを知っているか
			Ⅲ-3.これまでにレジデンス事業(制作もしくは発表)を見にきたことはあるか

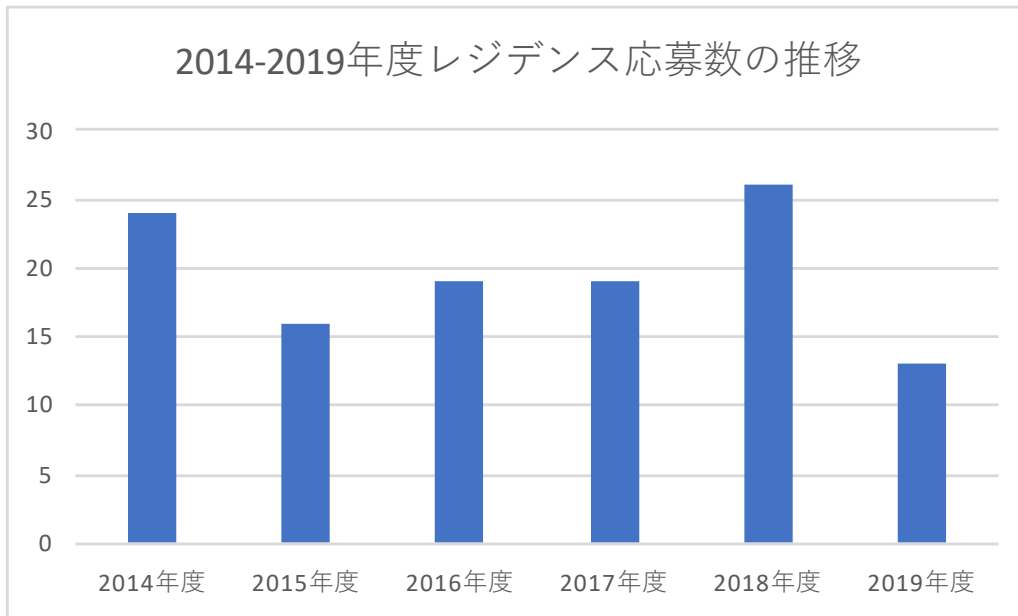
			III-4.「地域内外から多様な人材が集まっている」というイメージはあるか
			III-5.「多様なアートのあり方に触れることができる場」というイメージはあるか
		IVレジデンスアーティストをはじめとする地域外のクリエイティブ人材とのつながり	IV-1.レジデンスアーティストとのネットワークはできたか
			IV-2.レジデンスアーティストを介して地域外の他のクリエイティブ人材とつながったことはあるか
		V 地元クリエイティブ人材がレジデンスアーティストから受ける刺激	V-1.レジデンスアーティストの制作プロセス、発表、交流を通じてどのような刺激を得たか

(表 3-1-⑤) 評価のための指標と調査項目「市民」 筆者作成

指標			調査項目
アウトカム	市民が多様な芸術に触れる機会の充実	Ⅰ 施設や事業との関わり	Ⅰ-1.当該施設を知っているか
			Ⅰ-2.(Ⅰ-1で知っている場合)当該施設との関わりの状況
			Ⅰ-3.アーティスト・イン・レジデンスを知っているか
			Ⅰ-4.(Ⅰ-3で知っている場合)なぜ知っているか
			Ⅰ-5.これまでにレジデンス事業(制作もしくは発表)を見にきたことはあるか
			Ⅰ-6.(Ⅰ-5で来たことがある場合)来訪のきっかけは何か
		Ⅱ 多様な芸術の存在を知る	Ⅱ-1.アーティスト・イン・レジデンスで新鮮な作品が見られたか
			Ⅱ-2.当該施設や事業が多様な作品に親しむ場として機能しているか
		Ⅲ アーティストの活動を知る	Ⅲ-1.レジデンスアーティストと交流の機会があったか
			Ⅲ-2.交流の深度
			Ⅲ-3.クリエイティブな職業への理解

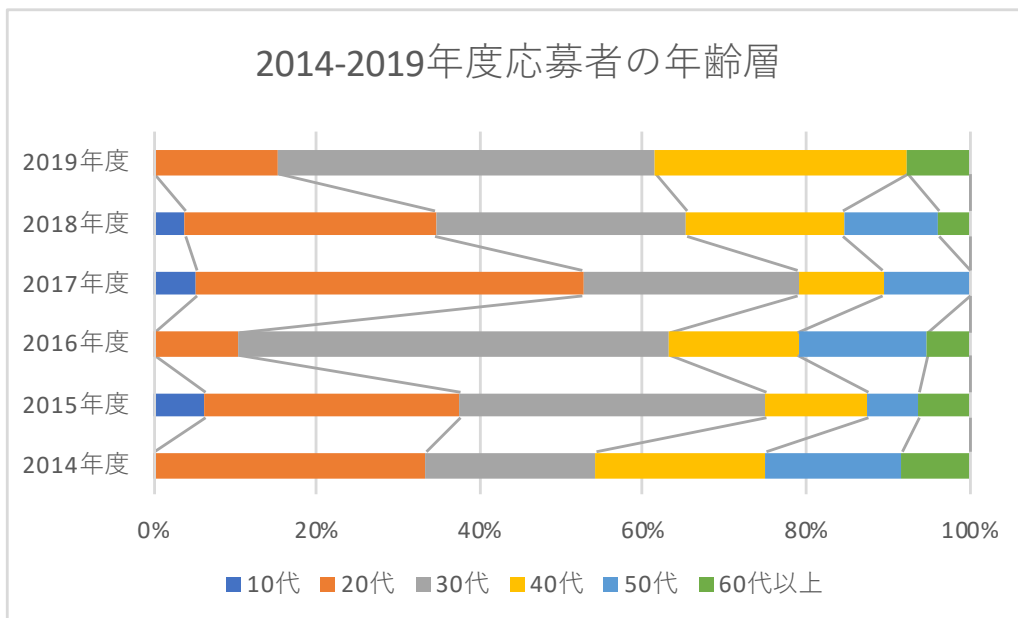
## 第4章

(図 4-1) 浜松市鴨江アートセンターのアーティスト・イン・レジデンス応募数推移



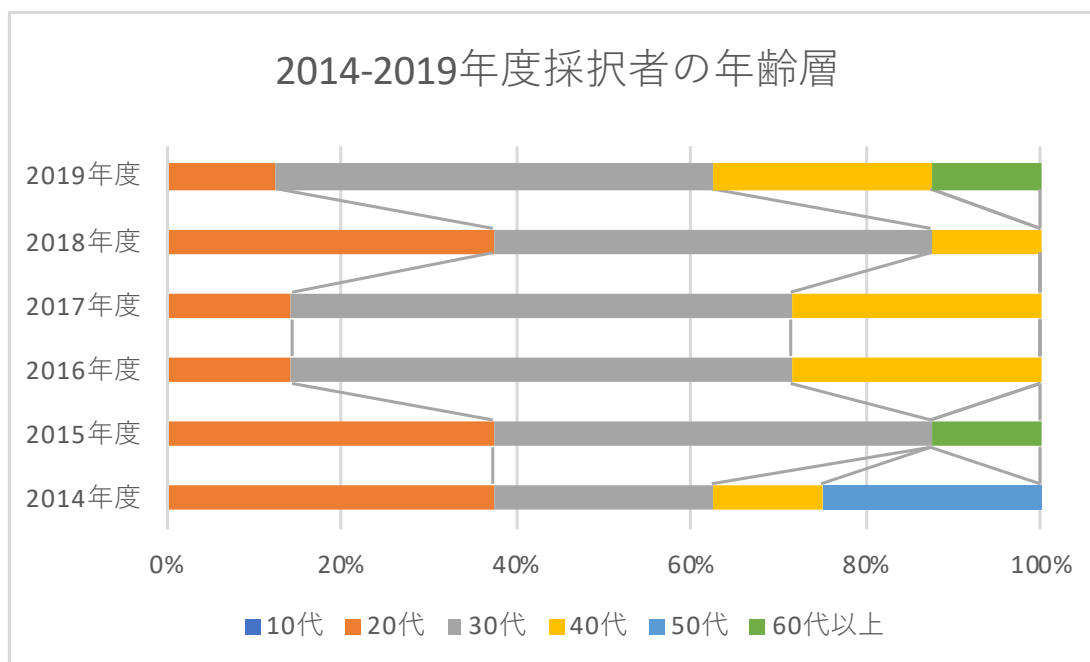
応募資料を元に筆者作成

(図 4-2-①) 浜松市鴨江アートセンターのアーティスト・イン・レジデンス応募者の年齢層



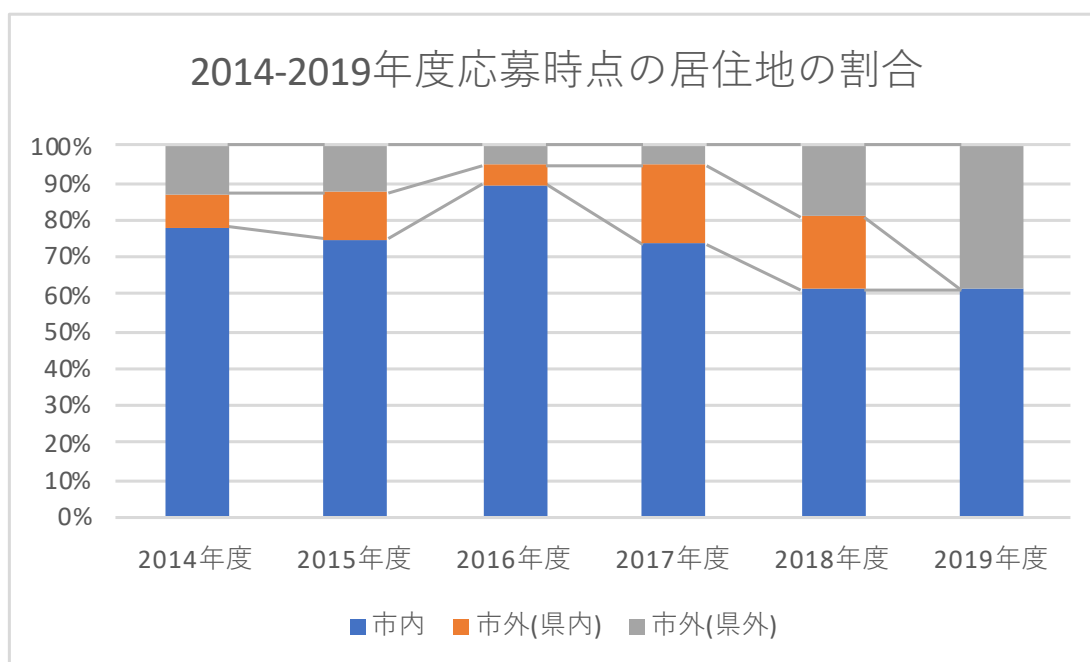
応募資料を元に筆者作成

(図 4-2-②) 浜松市鴨江アートセンターのアーティスト・イン・レジデンス採択者の年齢層



応募資料を元に筆者作成

(図 4-3) 浜松市鴨江アートセンターのアーティスト・イン・レジデンス応募者の居住地の割合推移



応募資料を元に筆者作成

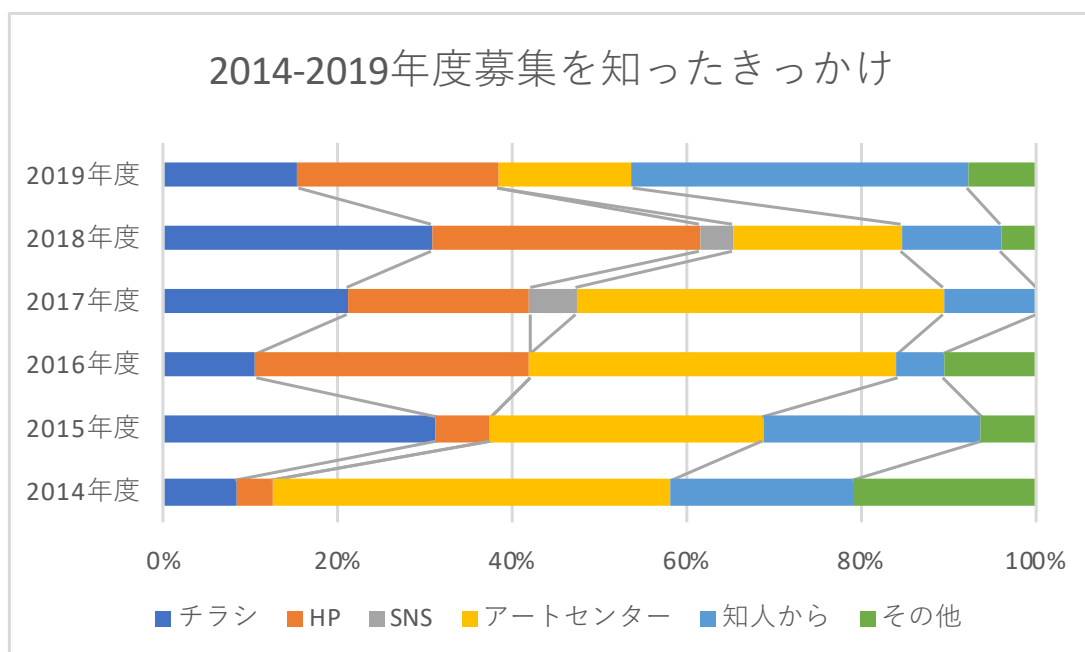


(表 4-1) 浜松市鴨江アートセンターのアーティスト・イン・レジデンス応募者の国籍

	2014 年度	2015 年度	2016 年度	2017 年度	2018 年度	2019 年度
日本国籍 (人)	23	15	17	19	25	12
外国籍(人)	1	1	2	0	1	1

応募資料を元に筆者作成

(図 4-4) 浜松市鴨江アートセンターのアーティスト・イン・レジデンス応募者の募集を知ったきっかけ

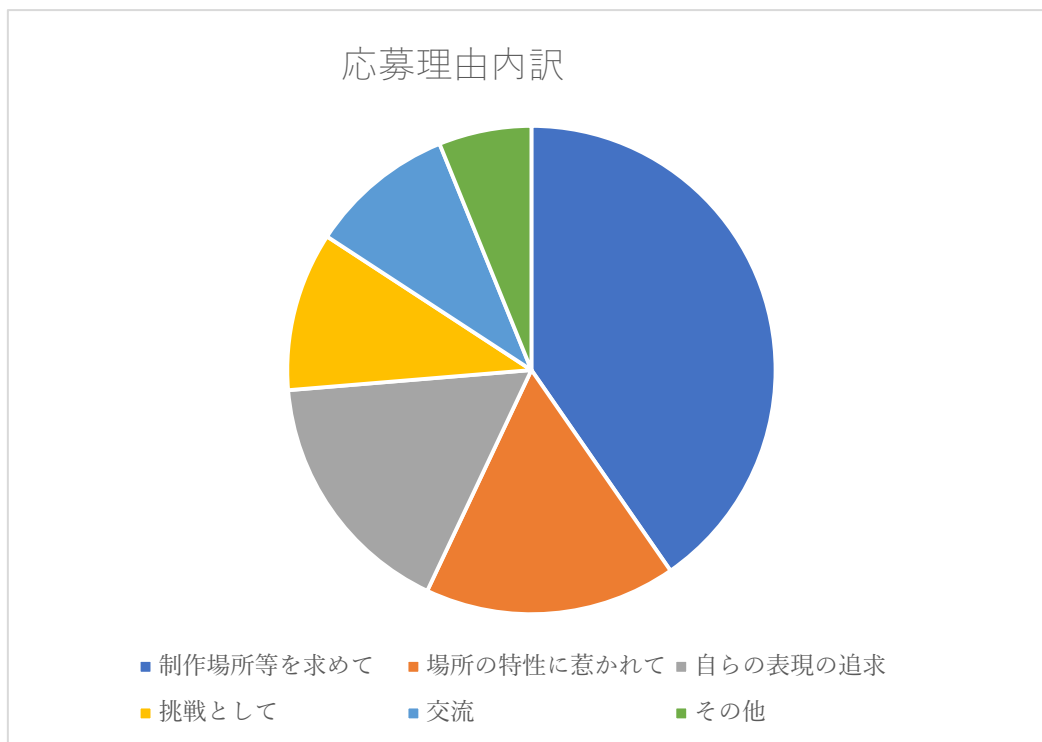


応募資料を元に筆者作成

以下凡例

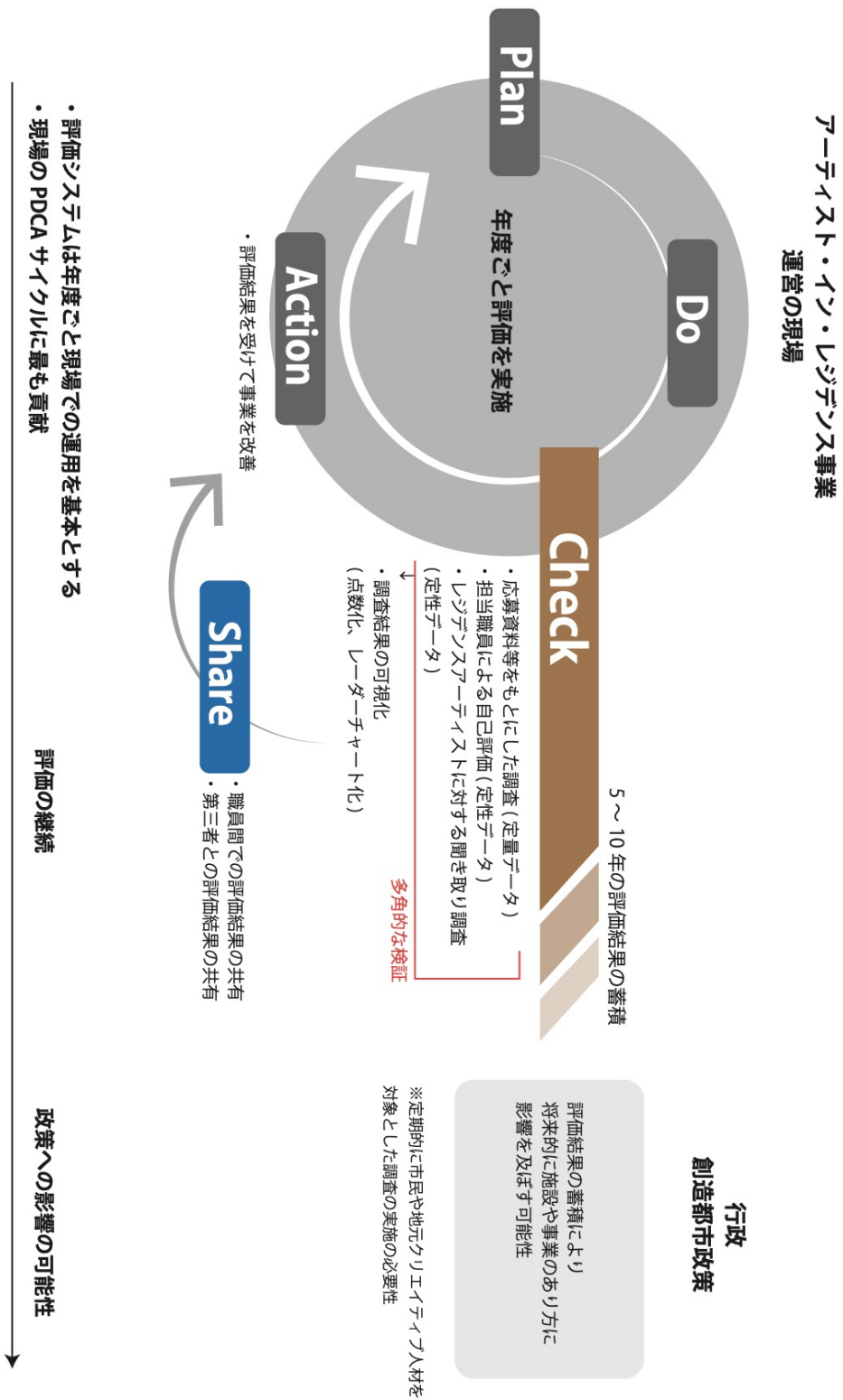
- \* 「チラシ」…アートセンターがアーティスト・イン・レジデンスの募集のために作成・配布するチラシを指す。
- \* 「HP」…浜松市鴨江アートセンターのホームページ
- \* 「SNS」…アートセンターが情報発信に使用している Facebook、Twitter のいずれかを指す。
- \* 「アートセンター」…アートセンターの職員経由で情報を得ることや、アートセンター内の掲示等を見るなどのきっかけを指す。
- \* 「知人から」…家族や知り合いから情報を得たというきっかけを指す。この中には歴代のレジデンスアーティストから口コミを得るなどのきっかけも含む。
- \* 「その他」…浜松市の広報誌「広報はままつ」や新聞、AIR\_J など外部の情報機関を通して情報を得た場合などを指す。

(図 4-5) 浜松市鴨江アートセンターのアーティスト・イン・レジデンス応募者の応募理由内訳



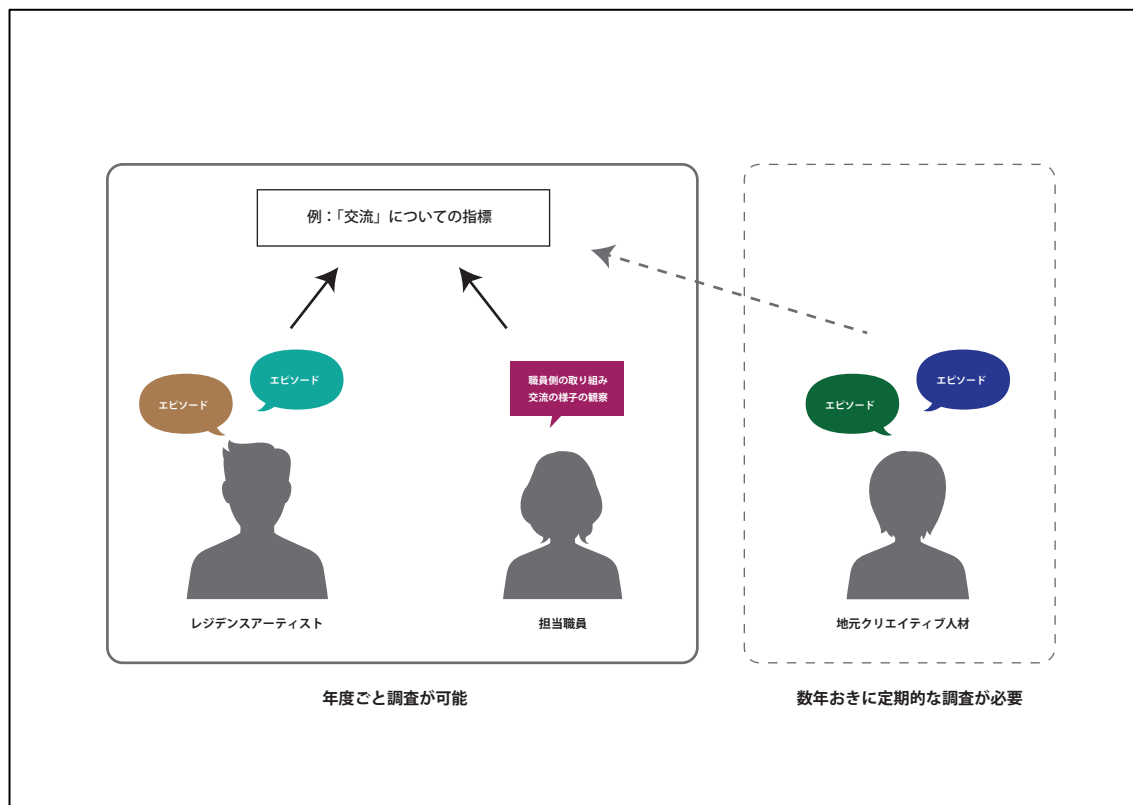
応募資料を元に筆者作成

(図 5-1)評価システム運用イメージ図 筆者作成



## 終章

(図 6-1)多角的な検証システムイメージ図 筆者作成



## 資料

(資料 A) 浜松市鴨江アートセンター外観 筆者撮影



(資料 B) 旧浜松銀行協会(木下恵介記念館)外観 筆者撮影



(資料 C-1)浜松市鴨江アートセンターのアーティスト・イン・レジデンス応募用紙①

<p>浜松市鴨江アートセンター 制作場所提供事業</p> <p>アーティスト イン レジデンス 2020</p> <p>Hamamatsu Kamoe Art Center Artist-in-Residence Program 2020</p>	
<p>氏名 (グループの場合はグループの代表者名) フリガナ Name (for a group, give a name of a group and its representative)</p>	<p>顔写真を添付してください</p> <p>Attach a portrait photograph here.</p>
<p>現住所 Contact Address</p>	
<p>生年月日 Birth date <input style="width: 20px;" type="text"/> <input style="width: 20px;" type="text"/> <input style="width: 20px;" type="text"/> <input style="width: 20px;" type="text"/> 年 year <input style="width: 20px;" type="text"/> <input style="width: 20px;" type="text"/> 月 month <input style="width: 20px;" type="text"/> <input style="width: 20px;" type="text"/> 日 day</p>	
<p>国籍 Nationality</p>	<p>職業 Occupation</p>
<p>Tel</p>	<p>E-mail</p>
<p>Website</p>	<p>SNS</p>
<p>アーティスト名/所属団体/グループ名 Name as a artist/Institute/group/Company</p>	
<p>ジャンル Field of Art</p>	
<p>経歴 (学歴・職歴・主な作品・活動歴・受賞歴・レジデンス制作歴などを記入してください) Personal History: Please outline your academic history, employment history, main exhibitions, history of activities-e.g., as artist-in-residence, awards received, etc.</p>	

出典：浜松市鴨江アートセンター

## (資料 C-2) 浜松市鴨江アートセンターのアーティスト・イン・レジデンス応募用紙②

Hamamatsu Kamoe Art Center Artist-in-Residence Program 2020

出典：浜松市鴨江アートセンター

(資料 D)インタビュー調査協力者一覧 筆者作成

対象の調査	所属分類		実施日	協力者
評価の試行	アーティスト・イン・レジデンス事業担当職員		2019/8/21	澤柳美千子
			2019/8/21	松岡瑠璃
	レジデンスアーティスト		2019/8/30	村上亜沙美
			2019/8/31	伊藤絵奈
			2019/8/31	廣瀬悠一
			2019/9/2	伊原正夫
			2019/9/12	池田ひとみ
			2019/9/18	明石雄
			2019/9/26	熊谷隼人
			2019/10/6	山本辰典
			地元クリエイティブ人材	アーティスト
	2019/10/31	B		
	2019/11/3	C		
	2019/11/26	D		
	ものづくり人材 (市内製造業勤務者や市内メーカー スペース関係者)	2019/9/28		E
		2019/10/15		F
		2019/10/16		G
		2019/10/17		H
		2019/11/14		I
評価システムの検証	浜松市 市民部創造都市・文化振興課		2019/10/29(事前説明) 2019/11/5(インタビュー)	浜松市鴨江アートセンター 担当者
	浜松市鴨江アートセンター		2019/11/22	館長 村松厚 澤柳美千子



(資料 E-1)担当職員に対するインタビュー調査結果 筆者作成

インプット (人材)	Ⅰ どのような人材が事業運営にあたっているか	
	調査項目	回答
	Ⅰ-1.担当職員の数はいく人いるか	担当は二人。二人ともここで働く以前には文化施設・レジデンスに関わる経験は無し。一名はアートセンターにてレジデンス運営スキルの蓄積あり。研修など無し。 地元クリエイティブ人材とのネットワークはある程度持っているが、最近はまだ新しい人を開拓できていないかもしれない。
インプット (予算)	Ⅱ 事業運営にかかる予算と内訳	
	調査項目	回答
	Ⅱ-1.予算総額はいくらか	作家への補助 2 万円×参加組数、レジデンス賞 7 万円
	Ⅱ-2.制作における補助の内容について	材料費・展覧会設営費込み込みの補助
	Ⅱ-3.滞在における補助の内容について	補助 2 万円以外の補助は無し
インプット (場所)	Ⅲ どのような場所が提供されているか	
	調査項目	回答
	Ⅲ-1.滞在の場所	滞在場所は各自確保する。市内在住者は自宅、市内に住まいのない人は賃貸など
	Ⅲ-2.制作の場所	アートセンター二階レジデンス部屋にて制作、壁に描くことなども現状復帰すれば自由に使って良い
	Ⅲ-3.成果発表の場所	浜松市鴨江アートセンターと旧浜松銀行協会が使える 指定管理で 2 館の一体管理となってから柔軟に対応できるようになったためそこに展示したいというレジデンスアーティストも増えてきたかもしれない。
インプット (時間)	Ⅳ 期間はどのくらい設けられているか	
	調査項目	回答

	IV-1.滞在制作の期間について	滞在制作は4ヶ月。退去には一週間くらい猶予あり。終わってから振り返りを実施している。
	IV-2.成果発表の期間について	成果発表期間に決まりはなし。成果発表の形式も自由。何らかの発表を行えばよい。
インプット (企画)	V 事業内容とその目的	
	調査項目	回答
	V-1.事業のビジョン	仕様書を意識。それ以上はあまり考えられていない。
	V-2.事業の目的	同上
	V-3.事業の内容	募集→審査→採択→入居という流れ 採択基準はあるが公開されていない

アウトプット (広報・募集・選定の実施)	VI 募集に対する応募数、適切な選定がなされたか	
	調査項目	回答
	VI-1.チラシの送付先を検討するときの工夫	市内、県内中心 全国の文化施設(特にレジデンスやっているところ)にも送っているが、他の施設に対して KAC の存在・活動を伝える意図もある
	VI-2.送付先の数はいくらぐらいか	約 200 箇所以上
	VI-3.広報の媒体について	チラシを中心に SNS、HP
	VI-4.応募は実現したか	これまで採択人数に対して応募数が下回ったことはない
	VI-5.選定委員会は機能したか	毎年度審査委員会は実施されている
アウトプット (人とのかかわる・その土地を知る)	VII 担当職員から見たレジデンスアーティストの交流の状況	
	調査項目	回答
	VII-1.レジデンスアーティストの交流の様子を観察していたか	交流の様子などは観察している レジデンスアーティストによって交流の様子は様々 2019 年度前期レジデンスアーティストの村上さんのようにアーティスト自身の発信力が強く、鴨江の外で繋がりが広がっていくということもあった

	VII-2.交流のきっかけづくりに貢献できたか	地元のアーティストなどがアートセンターを訪れた際にレジデンスアーティストを紹介することは意識してやっている。主観としてだが、市民との交流や紹介のつなぎ手になれていると思う。スタッフとの関係も意識(レジデンス部屋の鍵開けの習慣できっかけ作りなど)
アウトプット (作品の制作)	VIII アーティストの制作スケジュールの管理について	
	調査項目	回答
	VIII-1.制作スケジュールの状況についての把握はなされているか	観察するようにしている(何か気づいたら聞いてみる) 入居時のヒアリングでスケジュールの計画を把握、基本はこの時のヒアリングベースでアーティストの裁量に任せている
	VIII-2.制作スケジュールについてのフォローの有無	成果発表で使う部屋のブッキングや他の利用者との兼ね合いはフォローに入っているが、基本的にはアーティストの裁量に任せている
	VIII-3.定期的なミーティングの有無	なし 基本的に入居時のヒアリングのみ、アーティストから要請があれば都度ミーティングを実施している
アウトプット (発表)	IX 成果発表の実現	
	調査項目	回答
	IX発表は達成されたか(またその形式は何か)	これまで発表は達成されている 展覧会、ワークショップ、アーティストトーク、ライブなど

アウトカム (運営スタッフのスキル向上)	X スタッフのスキル習得の状況	
	調査項目	回答
	X-1.アーティスト・イン・レジデンスの運営を経験してどのようなスキルが身についたか	あまり自覚はない。 強いていうならアーティストとの接し方について 話を聞く役に回り、感想や解釈を伝えることの大事さに気づく→他事業でアーティストに接する時にも活かせる 同時に4人のマネジメントをするということ→管理能力、気回し

	X-2.職員間における ノウハウ・スキルの 共有の状況	体系的には共有されていない
	X-3.事業運営を通し た社会の多様性に対 する理解度	アーティスト・イン・レジデンス事業に限らず、アートセンタ ーそのものが多様な人を受け入れている 繋がりや多様性を活 かして(心がけて)事業を行なっている
	XI施設がクリエイティブ人材のネットワークハブとなれているか	
	調査項目	回答
	XI-1.レジデンスアー ティストとのネット ワークの状況	繋がりには SNS 情報が中心。2018 年度レジデンスについては参加 作家からの提案もあり実験的に冊子を作った(アーカイブ的に) あとはレジデンスアーティストのその後の展覧会チラシを配架 するなど こちらからイベントなど情報発信することはある その後を把 握していないアーティストもいる(どこで何してるかわからない) レジデンスでアーティストと 4 ヶ月過ごすことで、作品理解が できる→その後の事業の起用に繋がる(ワークショップのファシ リテーターなど)
	XI-2.レジデンスアー ティストを介した地 域外クリエイティブ 人材とのネットワー クの状況	レジデンスアーティストの知り合いなどが成果発表に来る→名 刺交換や SNS で繋がる程度 アートセンターSNS のフォロワー 数など小さな波及効果はあるかも
	XI-3.他のレジデンス 事業実施施設とのネ ットワークの状況	ほとんどなし 広報誌やチラシのやりとりはしている

	XI-4.事業運営を通して地元クリエイティブ人材とのネットワークが強化されたことはあるか	2019 年度前期レジデンスアーティストの村上さんの事例 村上さん自身の発信力によってできた地元の製本好きのネットワークを今後活かそう
	XII アーティスト・イン・レジデンスの運営経験は他の事業運営に影響を及ぼしているか	
	調査項目	回答
	XII-1.ネットワークを活かした事業展開がなされているか	ネットワークを活かした直接的な事例はないが、レジデンス事業が企画の発想につながっているかもしれない 「アートセンターゆかりのアーティストの支援」(2020 に予定、アートセンターで発表の機会を提供、アーティストから提案→事業を企画)、「2018 年度かもえまわる DAYS 内企画の AIR トーク」など
	XII-2.多様性を重視した事業が企画されているか	されている(事業の種類もターゲットも) 事業の手伝いに来てくれる頻度の高いサポートスタッフ(ボランティア)へ何か影響や効果があるかもしれない
	XII-3.スタッフのスキル・ノウハウに基づくクリエイティブな事業が企画されているか	普段来ない人へのアクセスの仕方を学ぶこともあった(カフェの実施など) レジデンスアーティストが「壁に描く」など実験的なことをすることでアートセンターでやれることが広がっていく(面白い事例が蓄積されていく) ↓ 企画の入り口になったり、アーティストの持ち込み企画に対してアドバイスができたりする

(資料 E-2)レジデンスアーティストに対するインタビュー調査結果 筆者作成

アウトプット (アーティストが土地にやってくる)	I どのような人物がレジデンスに参加したか	
	調査項目	回答
	I-1.年齢	20代から60代の男女8名
	I-2.国籍・普段の居住地/普段の制作拠点	・浜松在住者5名 ・県内在住者1名 ・県外在住者2名 全員が日本国籍
	I-3.レジデンス参加の動機	・子供たちと一緒に作る場を求めて。 ・かつて仕事で浜松に居住していた。一旦離れたものの浜松に戻るきっかけとして応募。また、制作の拠点として。 ・制作場所を求めて。 ・ワークショップなどの活動ができる場所を求めて。 ・アートセンターのレジデンスは2回目(1回目は大学4年の時)。浜松を離れることを決めたため、節目としてアートセンターで制作・発表がしたい。アートセンターでは大きい作品を作れるところがいい。 ・制作場所を自宅以外に持ちたかった。期間中集中して制作したかった。県内なので仕事を辞めずに通える。 ・福岡アジア美術館でチラシを見つけた。知らない場所で制作してみたかった。 ・地元でない場所で発表する機会を得たかった。滞在制作で何か変化を得られたらという期待。
	I-4.モチベーション(来る前と来た後変化の有無)	・子供たちの居場所作りが目的だったが、思いがけず自分の制作にも打ち込めた→今後自分の制作活動への意欲 ・これといった大きな変化はないが、制作の意欲は変わらず。 ・今後もレジデンスに参加してみたいと思った。 ・やりたかったことができた。しかしワークショップの活動が中心となってしまう自分の制作はあまりできなかったのが心残り。 ・アートセンターでの発表後、作品を大阪など他の場所でも展示する流れになった。レジデンスを通して自分の興味・可能性を開くことができたと思う。 ・個人の作品制作は孤独だが、レジデンス中は仲間に出会って前向きに制作に取り組めるようになった。 ・違うジャンルのレジデンスアーティストに出会って、自分の作品制作を考えるきっかけになったと感じている。 ・レジデンスでは少しやり残した感じがある→アーツ&クリエイションの補助事業に採択されたため、アートセンターでの制作を発展させてみたい。
	I-5.これまでのレジデンスの経験	・これまでレジデンスの経験がないという回答者5名 ・レジデンスの経験があるという回答者2名(うち1人は同施設レジデンスの2回目の参加者) ・レジデンスのような長期のものではないが展覧会に伴う滞在制作の経験があるという回答者1名

アウトプット (人とのかかわる・その土地を知る)	I-6.分野・ジャンル・領域	・子供へアプローチした創作活動 ・デジタルファブリケーション ・ミクストメディア ・製本 ・絵画、インスタレーション ・絵画、立体 ・編み物、インスタレーション ・リサーチ型制作、インスタレーションと映像
	II コミュニケーションの状況	
	調査項目	回答
	II-1.誰と交流したか	<p>・来訪者は知り合いが中心。同期のレジデンスアーティストとはあまり交流が持てなかった(仕事の都合による)</p> <p>・制作中(2F ロビー)に子供に話しかけられることがあった。他のレジデンスアーティストとも交流あり。同期レジデンスアーティストをきっかけとした新たな繋がりや、市内デザイナーと交流もあった→今後協働の可能性はある</p> <p>・同期レジデンスアーティストや過去のレジデンスアーティストとの交流があった。成果発表には比較的若い人が多く来てくれた印象。名古屋から見に来てくれた人もいた。滞在してみて知り合いが増えた感触がある。</p> <p>・同期や過去のレジデンスアーティストとの交流があった。部屋を様々な人が覗きに来てくれた(主婦のような人、障害者福祉施設の人たち)。製本教室には地元のイラストレーターや画家が参加してくれた。</p> <p>・同期の他のレジデンスアーティストとの交流は刺激があった。作品制作への向き合い方など。</p> <p>・滞在中に過去のレジデンスアーティストと知り合った。同期のレジデンスアーティストを介して知り合う人もいた。</p> <p>・ウゴクギャラリーという企画で作品と一緒に街に出て、そこで市民との交流があった。4ヶ月という間の割に様々な人に出会えたという印象。地元のアーティストとも知り合う。</p> <p>・県外の自宅での作業が多くなってしまい、あまりアートセンターにいらなかった。同期のアーティストからは刺激をもらった。</p>
	II-2.交流のきっかけは何であったか	<p>・共通の知り合いなど。</p> <p>・職員が繋いでくれたこともあった。</p> <p>・古本市をやった(自ら交流のきっかけ作り)。</p> <p>・自分から働きかけはあまりしなかった。</p> <p>・カフェスペースを設けて交流のきっかけづくりをした。制作のプロセスを見せる「作家の考えていることを伝えるスペース」。</p> <p>・同期のレジデンスアーティストが紹介してくれたことがあった。</p> <p>・特にきっかけを意識していなかった。どちらともなく会話が発生していたと思う。</p> <p>・特に意識していなかった。</p>
	II-3.交流の度合いはどの程度か	ほとんどの回答者が「名刺交換・SNSで繋がる程度」と回答
	II-4.交流について期待していて実現したこと	・振り返ってみて、あまり交流ができなかったことは心残りになっている。

	II -5.交流について期待していたが実現しなかったこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の制作ジャンルを知らない人と交流してみたい→そこから何かアイデアや刺激を得られないかという期待</li> <li>・実験的にやった古本市で若い人が買ってくれるなど交流のきっかけが生まれてよかった。意外な人が来てくれた印象。</li> <li>・東京だとワークショップに来る人はターゲットが大体絞られるため、浜松で色々な人に来てもらいたかった→実現した</li> <li>・同期レジデンスアーティストと新しいつながりが生まれたらいいという期待。</li> <li>・制作が目的だったため交流について期待していることは特になかった。</li> <li>・交流は大きな目的としていなかったが意外と交流があった印象。やはり一人で制作していると刺激がない。</li> <li>・同期レジデンスアーティストとグループで何かできたいという期待。大きなことは実現しなかったが、職員の協力を得てレジデンスのアーカイブ冊子を作れたのはよかった。</li> </ul>
	II -6.レジデンス期間中、地元クリエイティブ人材からどのような刺激を受けたか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域のクリエイティブ人材から刺激を受けたというよりは、アートセンターの建物の空間が制作に良かった。</li> <li>・クリエイティブ人材からの刺激ではないが、アートセンターの様々な人が入り混じる空間がよかった。コーラス練習の人や子供たちといった普通の人たちの気配があって程よく集中できた。</li> <li>・成果発表の展示方法について職員からアドバイスがもらえたのが刺激だったかもしれない。</li> <li>・具体的な刺激ではないが、滞制作する中で製本に関わる浜松の会社の社長と知り合って、今後制作に役立てたいと思っている。</li> <li>・クリエイティブ人材からの刺激に限らず、2F ロビーで実施したカフェスペースで色々な人から話を聞いたことが少なからず制作に影響していると思う。アートセンターは受け皿が大きい場所だと思う。</li> <li>・自分は市外に住んでいるが、浜松のアーティストがどのように活動しているか参考になった。一方で、地元のアーティストが自分の東京での話(大学時代やギャラリーに所属していた頃のこと)を欲しが印象を受けた。</li> <li>・県外在住者の立場から浜松(静岡)のアーティストの活動の様子がわかった。浜松の地域の様子がわかった。滞在をきっかけに地元アーティストのアトリエに行くことがあり、シルクスクリーンの経験をさせてもらった→作品に生かせるかも</li> <li>・浜松の文化について南と北で文化に違いを感じた(面白いようなポイント)。これからは浜松に関わりたい(アーツ&amp;クリエイションの補助事業とか)</li> </ul>
アウトプット (作品の制作)	III 作品制作のプロセスと状況	
	調査項目	回答
	III -1.制作の公開の有無	いずれのレジデンスアーティストも制作を公開していたと回答。中には集中したい時は扉を閉めていたという回答もあり。



	III-2.制作のスケジュールは順調であったか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・やや不調だったかもしれない。仕事との兼ね合いで時間が取れなかった。</li> <li>・順調</li> <li>・不調だった。コンセプトなどを悩み試行錯誤→職員のアドバイスでイメージが変化できた。</li> <li>・順調なスケジュールだった。</li> <li>・不調だった。作品の描きこみや設営が大変だった。これまでで一番大きな絵だったため。</li> <li>・順調だったと思う。</li> <li>・ギリギリだったが順調。スタッフに相談事があれば気軽に話しに行くことができた。</li> <li>・あまり順調でなかった(広報の仕事をアートセンターがやってくれるのはありがたい)。ただ、制作についてどこまでスタッフを頼っていいのか迷った。仕事を増やすのは申し訳ない気がした。</li> </ul>
アウトプット (発表)	IV 成果発表の実現	
	調査項目	回答
	IV-1.成果発表の実現は達成されたか	全員が達成(展覧会、ワークショップ、トーク、オープンスペースのカフェ、作品の街への展開等)。成果発表後に作品のテーマに基づいたイベントを開催したレジデンスアーティストもいた。
	IV-2.思い描いていたイメージ・理想などは達成できたか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・達成できた。自分の制作に対する意欲に刺激。</li> <li>・イメージは達成できた。ワークショップをやってみて、制作に気づきがあった</li> <li>・具体的なイメージは持っていなかったが、納得するかたちをアウトプットできたと思う。</li> <li>・イメージは達成できた。製本に興味がある人がいると実感した。部屋にアーティスト自身のキャプションみたいなものがあればもっとよかったかもしれない。</li> <li>・これまでで一番大きな絵を作るということについて達成感あり。空間演出の可能性について手応えを得た。来場者との縁でレジデンス後大分での音楽祭にて作品の野外展示をしたり大阪のギャラリーで作品を天井に展示してみたりといった展開に予想外に繋がった。</li> <li>・展示場所について決まった場所があるわけではない(自由度が高い)のでプレッシャーなく制作できた。</li> <li>・ある程度イメージを達成できた一方で、映像などもやってみたかったが時間的制約などで実現に至らなかった。</li> <li>・様々な事情で想定よりも活動の幅が小さくなってしまった。</li> </ul>

(資料 E-3)地元クリエイティブ人材に対するインタビュー調査結果 筆者作成

基本情報	Ⅰ 普段の地元クリエイティブ人材の活動の状況		
	調査項目	回答	
	Ⅰ-1.年齢と性別	アーティスト	20代から30代の男女4名
		ものづくり人材	20代から30代の男女5名
	Ⅰ-2.仕事・活動・制作の内容	アーティスト	・木工 ・イラストレーション ・演奏活動/サウンドアート/空間演出 ・グラフィックデザイン/シルクスクリーン
		ものづくり人材	・市内メーカーで研究開発(仕事とは別に電子楽器の制作) ・大学技官(前職は市内メーカー/仕事とは別にモビリティの制作) ・市内メーカーでシステム開発(仕事とは別にロボット等の制作) ・ITシステム開発 ・メーカースペース運営代表
	Ⅰ-3.刺激を受ける機会・場所・人について	アーティスト	<p>・東京にいた頃は他の人の展示とか意識していたが浜松に来てからはあまり意識していないかもしれない。周りのアーティスト仲間から刺激を受けることはある。</p> <p>・刺激は身近にはあまりないかもしれない。イラストなどの展示見に行くとしたら東京方面。イラストレーションのギャラリーなどで、その時気になった人などは注目している。</p> <p>・制作のベースは日常を確認する作業なので、住んでいる三ケ日の環境がいいと思っている。クリエイティブサポートレッツの人や取り組みは刺激的だと思う。</p> <p>・東京から浜松に戻ってきて美術館などに行く機会は減ってしまったが、デザインの仕事と並行しているワークショップの活動を通して子供達や障がい者から刺激を得ることがある。福祉とデザインの可能性に関心あり。</p>
		ものづくり人材	<p>・電子楽器については浜松に刺激がある。市内ライブハウスに出入りする人や自身が所属するグループメンバーなどから刺激を受けることがある。</p> <p>・あまり身近にはない。東京のメーカーフェアなどが刺激を受ける場所。</p> <p>・あまり意識したことはない。メーカーフェアやロボコンなどに参加することもある。</p> <p>・本職とは違うものづくり系の刺激は市内ワークスペースで受ける。技術面を教えてもらった。</p> <p>・国内外のメーカースペースの取り組みなど参考にしている。</p>

	Ⅰ-4.制作や発表を行う場所(拠点)はどこか	アーティスト	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自宅の工房で制作。oiai 美術展(緑屋美術研究所 OB による展覧会)に学生の頃からずっと参加している。そこでのネットワークもあり。</li> <li>・自宅で制作している。個展やグループ展もやっている。OPEN ART CLASS や ZING など。場所は浜松だったり東京だったり。</li> <li>・東京などの都市にいくと演奏機会がある。即興ライブや空間と時間を生かす自身のスタイルは浜松で発表したとしても東京などのお客さんが多い傾向。(浜松の人は前衛的な音楽に興味ない?)</li> <li>・自宅や工房で制作している。</li> </ul>
		ものづくり人材	<ul style="list-style-type: none"> <li>・プライベートで制作し、市内ライブハウスなどで活動(アートセンターでワークショップ実施経験あり、今後も予定あり)。市内での発表の場は多いように思う。</li> <li>・メーカースペースを利用して制作。発表はメーカーフェアに出展。</li> <li>・メーカースペースや会社の機材を利用して制作。メーカーフェアに出展。</li> <li>・ものづくりについて特に発表は行っていない。</li> <li>・メーカースペースで制作。</li> </ul>
	Ⅰ-5.他の地元クリエイティブ人材とのネットワークの状況について	アーティスト	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アーティスト関連のネットワークはいつものメンバー、という感じ。結構限定されているかも。</li> <li>・アートセンターなどで関わる人や芸術系高校のOBOG など</li> <li>・サウンドアートは全国に横のつながりがある。アートセンターでのつながりや大学時代のつながり。</li> <li>・繋がりのあるメンバーは固定化しているかもしれない。</li> </ul>
		ものづくり人材	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ライブハウスでの繋がり大きい。あとは電子楽器を作る人たちのコミュニティ。</li> <li>・メーカースペースを通した繋がり。市内メーカー勤務の人たちともネットワークあり。</li> <li>・ロボコン関連のネットワーク。</li> <li>・仕事とは関係ないところだが、書道をやっていてその繋がりがある。展示の経験もある。</li> <li>・市内の市民活動系 NPO やスタートアップ系の人たちを知っている。アーティストとの繋がりはいらないが何人か知っている。</li> </ul>

	II 自治体との関わり		
	調査項目	回答	
	II-1.どのような関わり方をしているか	アーティスト	<ul style="list-style-type: none"> <li>・浜松市美術館でワークショップをやったことがある。</li> <li>・市内のスペースでやっていた ZING の活動→場所がなくなってからみんはま(みんなの浜松創造プロジェクト)の助成を取った。</li> <li>・みんはま(みんなの浜松創造プロジェクト)の助成獲得経験あり。浜松市ともつながりがある。</li> <li>・みんはま(みんなの浜松創造プロジェクト)の助成獲得経験あり。</li> </ul>
		ものづくり人材	<ul style="list-style-type: none"> <li>・浜松市の主催する音楽イベントへ出展者として参加。</li> <li>・特になし。</li> <li>・浜松市がどの程度関わっているのか定かではないがイベントでワークショップの経験あり。</li> <li>・特になし。</li> <li>・浜松市主催イベントへの参加。みんはま(みんなの浜松創造プロジェクト)の助成獲得経験あり。</li> </ul>
	II-2.創造都市政策を知っているか	アーティスト	「聞いたことはある」という回答 3 名。1 名は仕事で市の広報媒体の制作に関わったことがあり、ある程度のことは知っているという回答した。
		ものづくり人材	「聞いたことはある」という回答 4 名。1 名は関連書籍を読んだことがあると回答。施策による活動の充実感はありませんという回答もあった。

アウトカム (地元クリエイティブ人材の創造性を刺激)	III 施設において実施されるアーティスト・イン・レジデンスの認知度とその印象		
	調査項目	回答	
	III-1.当該施設を知っているか	アーティスト	<ul style="list-style-type: none"> <li>・鴨江別館(アートセンターの前身)の頃から知っている。事業に関わったことがある。</li> <li>・鴨江別館(アートセンターの前身)の頃から知っている。仕事の打ち合わせなどでロビーを使うこともある。</li> <li>・初期から知っている。事業で関わることもあるし貸室も使っている。</li> <li>・鴨江別館(アートセンターの前身)の頃から知っている。</li> </ul>

		ものづくり人材	<ul style="list-style-type: none"> <li>・知っている。アートセンターでワークショップをやったこともある。</li> <li>・知っている。行ってみたこともあるが、やっていることについて詳しくは知らない(美術館とどう違うのか)。</li> <li>・知っている。行ったこともある。</li> <li>・知っているが行ったことはない(行ってみたい)。</li> </ul> <p>どんなところが具体的にわからない。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・設立当初から知っている。ワークショップやトークなどで関わりもある。</li> </ul>
	III-2.アーティスト・イン・レジデンスを知っているか	アーティスト	<ul style="list-style-type: none"> <li>・知っている</li> <li>・初期の頃から知っている</li> <li>・知っている</li> <li>・初期の頃から知っている</li> </ul>
		ものづくり人材	<ul style="list-style-type: none"> <li>・聞いたことはある(電子楽器の制作で知っている人がレジデンスに参加)</li> <li>・知らない</li> <li>・聞いたことはある</li> <li>・聞いたことはある(知り合いが参加)</li> <li>・知っている</li> </ul>
	III-3.これまでにレジデンス事業(制作もしくは発表)を見にきたことはあるか	アーティスト	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アートセンターの秋の大きなイベントとタイミングが重なっていたため見た。狙ってくるというよりはたまたまその時やっていたから、という感じ。</li> <li>・イベントなどに行ったついでに見るという感じ。特にアートセンターの秋のイベントはレジデンス発表とも時期が重なっていたため。アーティスト・イン・レジデンスのワークショップには今年製本教室で初めて参加。レジデンスアーティストの村上さんにとっても興味を持った。</li> <li>・自宅からアートセンターが遠くなかなか行けない。用事のついでに展示を見るくらいで制作中を覗くことができない。しかし滞在制作に興味はあるため、子育てがひと段落して余裕ができたなら自分もやってみたい。</li> <li>・用事のついでが多く毎回見にくる訳ではないが、気になった人がいれば部屋を訪れることもある。</li> </ul>

		ものづくり人材	<ul style="list-style-type: none"> <li>・別の用事で来た時にちらっと見たことがあるかもしれない。</li> <li>・知らなかったので見にいったことはない。しかしアートに興味はある。公開日などが分かれば行きたい。</li> <li>・たしか興味のある情報を得て見に行ったことがあると思う。関心ある人や展示なら行く。</li> <li>・知らなかったので見にいったことはない</li> <li>・気になる人がいる時</li> </ul>
	<p>III-4.「地域内外から多様な人材が集まっている」というイメージはあるか</p> <p>III-5.「多様なアートのあり方に触れることができる場」というイメージはあるか</p>	アーティスト	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アートセンターは場所貸しというイメージが強い。アートの集積などはあまり感じない。</li> <li>・外国人がアートセンターで活動しているのを見て、色々な人がいる場所だと思う。ゆるい空間だと思っている。ハードルは低い。</li> <li>・フラットな公共施設だと思う。アートセンターで自分の活動をやっていると近所のおじさんなどがふらっと来ることがあって面白い。ワークショップなどの取り組みをたくさんやっているというイメージ。</li> <li>・最近取り組みが充実していて賑やかなイメージ。レジデンスアーティストは4ヶ月しか滞在しないので入れ替わり(循環)が早い印象がある。→意識的に行かなくても何かした作品が目に入る環境だと思う。</li> </ul>
		ものづくり人材	<ul style="list-style-type: none"> <li>・不思議な人(面白い人)が多い印象。ただ、アーティスト・イン・レジデンスなどの取り組みの情報(チラシ)を見たことがない。ライブハウスなどにチラシ置いてみたらどうか。</li> <li>・アートセンターは絵画など割とかわちりしたアートがある場所だと思っていた。インタビューを受けて多様な人やアートを扱っていることを知った。</li> <li>・アートセンターのレジデンス事業の取り組みに限らず、アートセンター全体として色々な人が集まっているイメージ。</li> <li>・地域のアートセンターなので、地域の人が集まっている(公民館のような)イメージだった。そのため、多様な人が集まっているイメージはなかった。</li> <li>・アートセンター全体の印象として吹奏楽や演劇など色々な人が来ているイメージ。</li> </ul>

IVレジデンスアーティストをはじめとする地域外のクリエイティブ人材とのつながり		
調査項目	回答	
IV-1.レジデンスアーティストとのネットワークはできたか	アーティスト	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2018年度前期レジデンスの参加作家に依頼されて作品の額作りをした。過去のレジデンスアーティスト(2017年度のレジデンスアーティスト)の作品が印象に残っていて、その後自分が参加したアートプロジェクトに偶然その作家が来訪し、そこでの会話でアートセンターのアーティスト・イン・レジデンスのことと繋がった経験がある。</li> <li>・SNSで繋がるなど(それ以上の交流にはまだ発展していない)。かつてレジデンスアーティストが自分のアルバイト先が運営しているシェアハウスに滞在していてそこで知り合ったという経験もある。</li> <li>・レジデンスきっかけに新たに知った浜松のアーティストやクリエイターが何人かいる。</li> <li>・これまでレジデンスをきっかけに新しく知る人もいた。2019前期のレジデンスアーティストの村上さんを誘ってワークショップを実施した。</li> </ul>
	ものづくり人材	ネットワークができるほどの交流はしていない。
IV-2.レジデンスアーティストを介して地域外の他のクリエイティブ人材とつながったことはあるか	アーティスト	ない
	ものづくり人材	ない
V 地元クリエイティブ人材がレジデンスアーティストから受ける刺激		
調査項目	回答	
V-1.レジデンスアーティストの制作プロセス、発表、交流を通じてどのような刺激を得たか	アーティスト	<p>すべての回答者に共通してレジデンスアーティストからこれといった刺激を受けた経験はまだないという回答。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・このような人がいるのかという印象。</li> <li>・知らないフィールドを知れた。</li> </ul>
	ものづくり人材	刺激を受ける段階に至っていない。